# 若槻環濠第１次発掘調査報告書

２０００

大和郡山市教育委員会

# 若槻環濠第１次発掘調査報告書

大和郡山市教育委員会

若槻環濠集落（1986年撮影）

# 例　　言

1　本書は、大和郡山市若槻町50－１、51、225－１で実施した発掘調査の報告書である。

2　調査は、市内遺跡の範囲確認調査として、国庫補助事業で実施した。

3　調査期間、調査面積は下記の通りである。

**調査期間**

平成11年８月２日～24日

**調査面積**

117㎡

4　調査は、以下の組織で実施した。

**現地調査**

調査員：山川均（大和郡山市教育委員会　社会教育課）

補助員：束原真希子（奈良大学）、武田浩子

作業員：㈱島田組

**事　　務**

大和郡山市教育委員会　社会教育課

5　本書は、以下の分担で作成した。

**製図・拓本・トレース**

岡本智子（奈良大学）、束原、武田、山川

**執筆・編集・写真撮影**

山川

**レイアウト**

山川（本文）、岡本（遺物実測図）、武田（遺物写真等）

6　調査に際し、以下の方々に貴重なご教示・ご指導をいただいた（順不同敬称略）。

金田章裕、南出眞助、堀健彦、田中一廣、金田直子、信田真美世、本村充保、伊藤雅和、佐藤亜聖、藤澤典彦、今尾文昭。

7　現地調査に際しては、地元自治会の前川治弘氏、土地所有者の加奥昌延氏より多大な協力を得た。

# 本 文 目 次


Ⅰ　調査の契機および経過……1
Ⅱ　調査地周辺における既往の調査……1
Ⅲ　調査の概要
　1　トレンチの設定……4
　2　第1トレンチ……4
　3　第2トレンチ
　（1）遺構……5
　（2）遺物……7
　4　第3トレンチ
　（1）遺構……13
　（2）遺物……16
Ⅳ　まとめ……25


# 図　目　次


図1　大和郡山市の位置……iv
図2　調査地点位置図（S：1／25,000）……1
図3　既往の調査地点位置図（S：1／10,000）……2
図4　第2トレンチ調査前の状況（東より）……4
図5　第3トレンチ調査前の状況（西より）……4
図6　トレンチ配置図（S：1／5,000）……4
図7　第2トレンチ平面図（S：1／50）……5
図8　第2トレンチ完掘状況写真（南より）……5
図9　第2トレンチSD－01完掘状況写真……5
図10　第2トレンチSD－01断面図（S：1／50）……6
図11　第2トレンチSD－01護岸施設立面図（S：1／50）……6
図12　第2トレンチSD－01堰平面図および立面図（S：1／20）……7
図13　第2トレンチ堰背面状況写真（南西より）……7
図14　第2トレンチSD－01表土層および野井戸出土遺物実測図（S：1／3）……8
図15　第2トレンチSD－01表土層出土遺物写真……9
図16　第2トレンチ野井戸出土遺物写真……9
図17　第2トレンチSD－01上層出土遺物実測図（S：1／3）……10
図18　第2トレンチSD－01上層出土遺物写真……11
図19　第2トレンチSD－01中層出土遺物実測図（S：1／3）……12
図20　第2トレンチSD－01中層出土遺物写真……12
図21　第2トレンチSD－01下層出土遺物実測図（S：1／3）……13
図22　第2トレンチSD－01下層出土遺物写真……13
図23　第3トレンチ平面図（S：1／50）……14

図24　第３トレンチ完掘状況（南西より）……14
図25　第３トレンチ完掘状況（北西より）……14
図26　第３トレンチ SD－01断面図（Ｓ：１／50）……15
図27　第３トレンチ SD－02土層断面図（Ｓ：１／20）……15
図28　第３トレンチ SD－02土層堆積状況写真（西より）……15
図29　第３トレンチ SD－04遺物出土状況実測図（Ｓ：１／20）……16
図30　第３トレンチ SD－04遺物出土状況写真（東より）……16
図31　第３トレンチ SD－04土層断面図（Ｓ：１／20）……16
図32　第３トレンチ SD－01上～中層出土遺物実測図（Ｓ：１／３）……17
図33　第３トレンチ SD－01上～中層出土遺物写真……18
図34　第３トレンチ SD－01下層出土遺物実測図（Ｓ：１／３）……19
図35　第３トレンチ SD－01下層出土遺物写真……19
図36　第３トレンチ SD－02出土遺物実測図（Ｓ：１／３）……20
図37　第３トレンチ SD－02出土遺物写真……20
図38　第３トレンチ SD－04出土遺物実測図（Ｓ：１／３）……21
図39　第３トレンチ SD－04出土遺物写真１……22
図40　第３トレンチ SD－04出土遺物写真２……23
図41　SD－01出土木製品実測図（Ｓ：１／３）……24
図42　SD－01出土木製品写真……24
図43　14世紀初頭の若槻荘周辺の集落配置復元図および灌漑システム模式図……26

# 表　目　次

表１　調査地周辺における既往の調査一覧表……３
表２　遺物観察表１……28
表３　遺物観察表２……29
表４　遺物観察表３……30

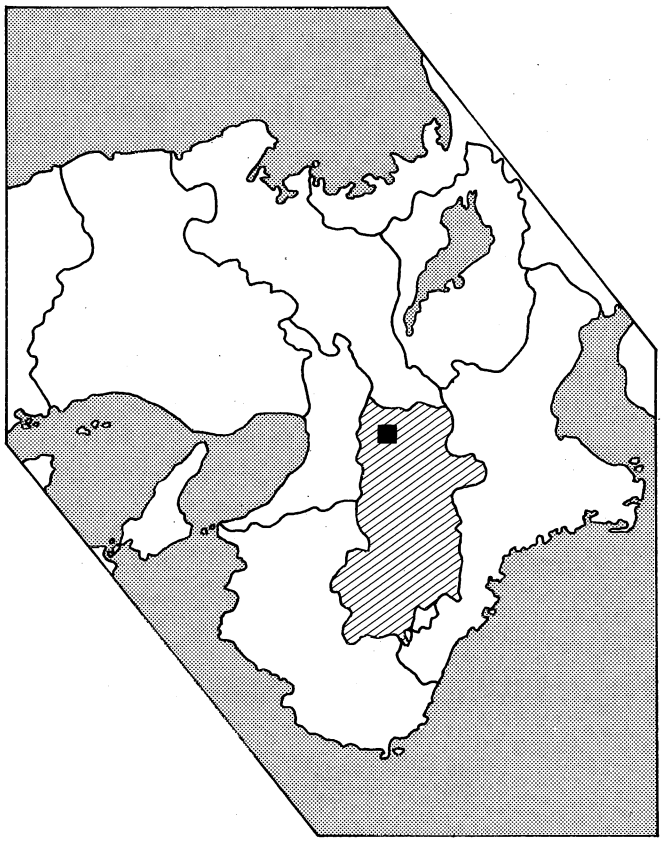


図１　大和郡山市の位置

# Ⅰ　調査の契機および経過

今回の調査は、市指定文化財（史跡）である若槻環濠において、環濠のコンクリートブロックによる改修が地元自治会によって計画されていること、また近年流入土砂による埋没等によって環濠の旧景観が著しく変化していることなどを踏まえ、遺跡自体の重要性や、その現況景観保全に関しての困難な状況を勘案し、平成11年度国庫補助事業として実施したものである。調査の主な目的は、環濠の基底部まで発掘・精査することによって環濠の形成時期や変遷、またその規模や形状などの具体的データを得ることに置き、限られた費用・期間を最大限に活用することを企図した。

調査期間は平成11年８月２日から24日まで、調査面積は約117㎡である。

# Ⅱ　調査地周辺における既往の調査

今回の調査地周辺における既往の調査に関しては以前に詳述したこともあり[1)]、ここでは今回の調査に関係する時期のものを中心に略述することにしたい。

本地域における平安時代の代表的な遺跡は、時期的に９世紀末～10世紀初頭頃に集中する傾向がある。例えば、大規模な掘立柱建物が３棟検出された４（図３および表１における記載番号。以下同様）があり、また14でもここほぼ同時期と思われる掘立柱建物が１棟検出されている。さらに、下ツ道（３・９）の調査においても側溝の最終的な埋没時期はほぼこの時期に比定されるほか、自然河道を人為的に埋積した痕跡が明瞭に検出された11では、やはりこの時期の土器に混じ、小型の銅鏡などが出土してい

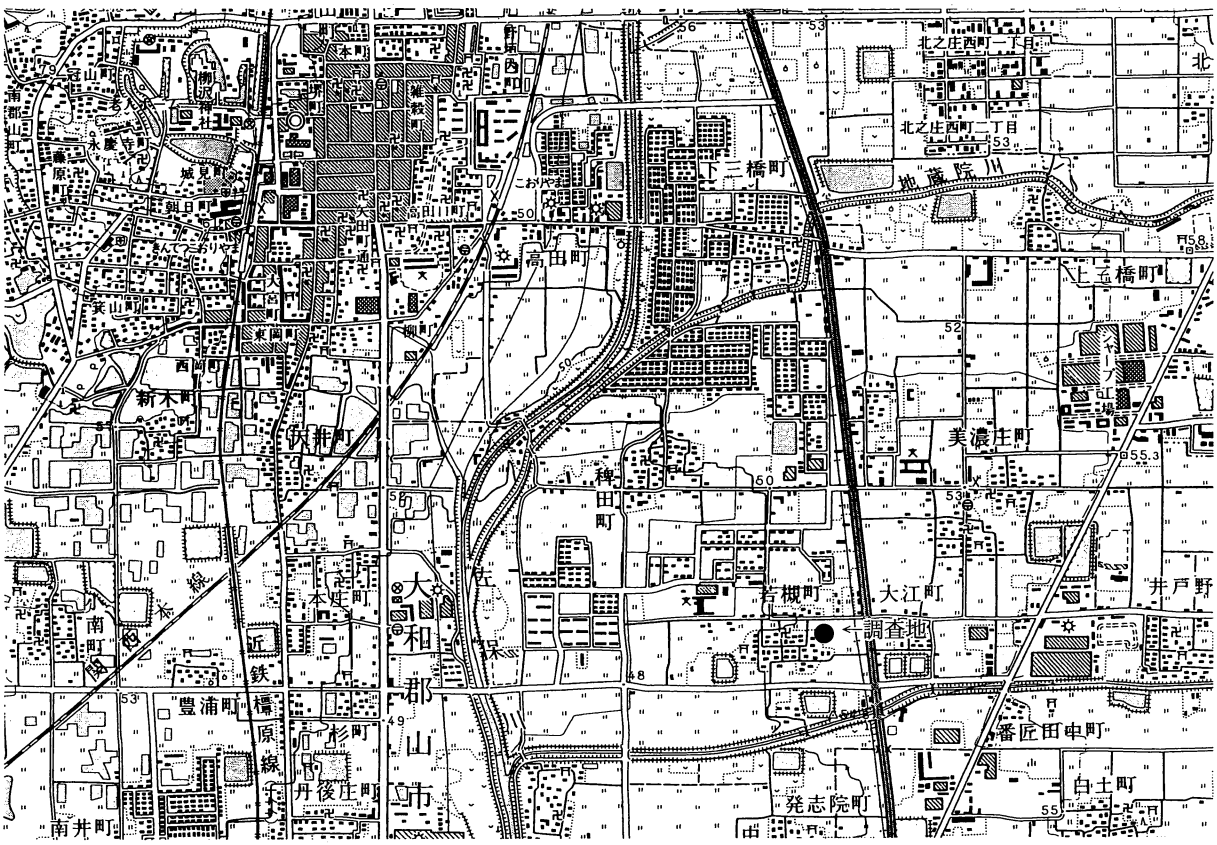



**図２　調査地点位置図（Ｓ：１／25,000）**（国土地理院１：25,000地形図「大和郡山」に加筆）

る。自然河道や官道側溝の人為的埋積を、この地域における耕地開発に伴う一連の事業として捉えるならば、どうやらこの時期に、当該地域においては大規模な開発行為が盛んに行われたようである。この場合、先述の掘立柱建物もまた、開発に関わる何らかの拠点的な意味合いで理解する必要があるだろう。[2)]

次に、11～12世紀の状況をよく示す遺跡としては、11がある。ここでは現在の集落（集村域）からややはずれた部分において、溝などで囲まれない小規模な（おそらく数棟単位の）居住域と生産域の一部が検出されており、当該地区における集村化以前の状況を示すデータとして貴重である。

13世紀の状況は、公表されたデータの中では今一つ判然としないが、特筆すべきなのは7である。ここでは若槻池の堤体が発掘調査で断ち割られ、その古い段階の堤体中から13世紀代の瓦器が出土している。したがって、この調査によって少なくとも現在見られるような若槻池の築造は13世紀以前にはさかのぼらないことが明らかとなった。

14～15世紀における状況は、正式な報告書が未刊の調査が多いため時期的な明瞭さは欠くが、5では一辺が約50ｍの環濠で囲まれた屋敷地が検出されている。現在の集村域からややはずれた位置におけるこうした居館の存在は、中世の若槻荘を考える上で無視できない要素といえる。

なお、若槻荘における従来の研究史上の主要な論点は、現在見られるような若槻荘の景観の確立時期であった。換言すれば、現在のような集村（環濠集落）の形成時期が主たる関心事であったのだが[3)]、これまでの調査においては、そうした問題に直接回答を与え得るようなものは皆無であった。それは、そうした集村（環濠集落）が現在の居住域と一致することからすれば当然のことではあるが、今回の調査はこれら従前の調査の欠落部分を補う意味においても非常に重要といえるものである。

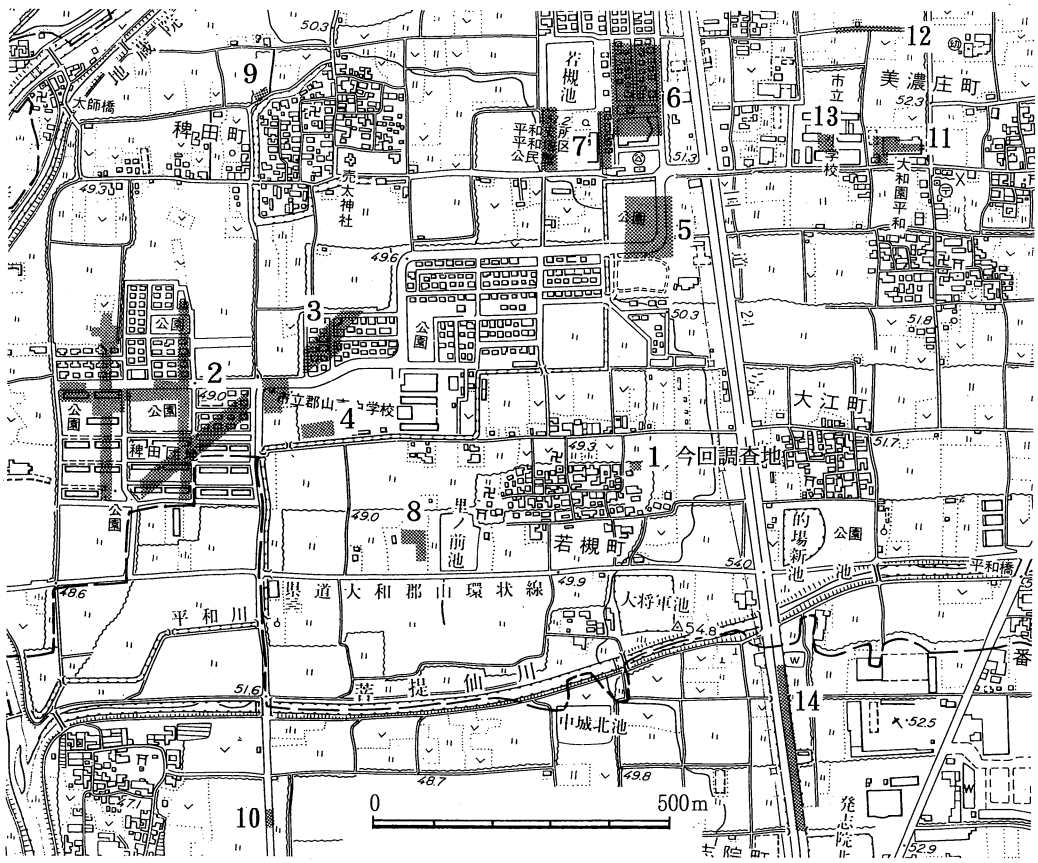



**図３　既往の調査地点位置図**（Ｓ：１／10,000）（大和郡山市１：10,000都市計画図に加筆）

| 図番 | 調　査　名　称 | 主　な　遺　構 | 備　　考 | 文献 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 若槻環濠第1次 | 今回調査地 | | |
| 2 | 若槻荘関連遺跡（八ノ坪地区ほか） | 水田（古墳後期）、旧河道（奈良）、素掘小溝（平安） | 旧河道より多量の祭祀遺物出土 | 1 |
| 3 | 若槻荘関連遺跡（今西地区ほか） | 旧河道（奈良）、官道（下ツ道） | 旧河道より橋脚検出 | 2 |
| 4 | 若槻荘関連遺跡（嶋北地区） | 掘立柱建物3棟・井戸（平安） | 比較的大型の建物 | 3 |
| 5 | 若槻荘関連遺跡（フゲクヨ地区） | 井戸、土坑、環濠屋敷（室町） | 環濠一辺約50m | 4 |
| 6 | 若槻荘関連遺跡（五反ヲサ地区ほか） | 旧河道（縄文、奈良）、土坑（古墳）、素掘小溝（中世） | 素掘小溝の体系的調査 | 5 |
| 7 | 若槻荘関連遺跡（若槻池地区） | 溜池堤体（鎌倉） | 新旧2時期の堤体あり | 6 |
| 8 | 若槻荘関連遺跡（カナヤケ地区） | 旧河道（弥生）、土壙墓（古墳）、土坑（平安） | 土坑に関しては文献10に記載 | 7 |
| 9 | 下ツ道関連第2次 | 下ツ道東側溝 | | 8 |
| 10 | 下ツ道関連第2次 | 橋脚 | | 8 |
| 11 | 美濃庄遺跡（今倉地区） | 旧河道（平安）、井戸・掘立柱建物（平安末～鎌倉前） | | 9 |
| 12 | 美濃庄遺跡（ツクタ地区ほか） | 包含層（弥生） | | 10 |
| 13 | 美濃庄遺跡（四反田地区） | 旧河道（古墳～平安）、溝（弥生）、土坑（鎌倉） | | 11 |
| 14 | 発志院遺跡 | 土坑（古墳前期）、掘立柱建物1棟（平安） | | 12 |

**表1　調査地周辺における既往の調査一覧表**

【参考文献一覧】（表1に対応）


1　中井一夫「稗田遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1976年度』奈良県立橿原考古学研究所，1977

2　中井一夫「稗田・若槻遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1980年度』奈良県立橿原考古学研究所，1981

3　泉武「若槻遺跡第2次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1981年度』奈良県立橿原考古学研究所，1982

4　中井一夫「若槻庄関連第3次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1981年度』奈良県立橿原考古学研究所，1982

5　中井一夫「若槻庄関連第4次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1982年度』奈良県立橿原考古学研究所，1983

6　服部伊久男『若槻池発掘調査報告書』大和郡山市教育委員会，1987

7　服部伊久男『若槻遺跡カナヤケ地区発掘調査概要報告書』大和郡山市教育委員会，1990

8　服部伊久男「下ツ道第2・3次発掘調査報告」『稗田環濠』大和郡山市教育委員会，1992

9　山川均・伊藤雅和『美濃庄遺跡今倉地区発掘調査報告書』大和郡山市教育委員会，1997

10　前園実知雄「大和郡山市美濃庄遺跡出土の弥生式土器について」『青陵』26　奈良県立橿原考古学研究所，1974

11　山川均『美濃庄遺跡四反田地区発掘調査概要報告書』大和郡山市教育委員会，1988

12　藤井利章ほか『発志院遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第41冊　奈良県立橿原考古学研究所，1981

# Ⅲ　調査の概要

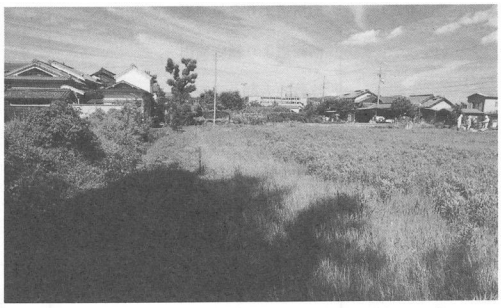


図４　第２トレンチ調査前の状況（東より）

図５　第３トレンチ調査前の状況（西より）

## １　トレンチの設定（図６）

今回の調査は、現状で環濠部分が水路として使われていない部分について、休耕田や地元自治会所有の土地を選んでトレンチを設定した。トレンチの合計は３本で、それぞれの調査面積の合計は117.4㎡である。

## ２　第１トレンチ

本トレンチは、環濠の本来の幅員が現状の北側（外側）に及んでいる可能性を想定して設定したものである。長さ約17ｍ、幅約1.6ｍ（面積27.2㎡）、掘削深度は約１ｍを測る。調査の結果、環濠は本トレンチの設定区域までは及んでいないことが判明した。また、顕著な遺構・遺物は確認できなかったことから、この区域は中世においても耕地であったものと思われる。したがって、集落（居住域）はこの部分（環濠の北側）には及んでいなかったものと判断される。

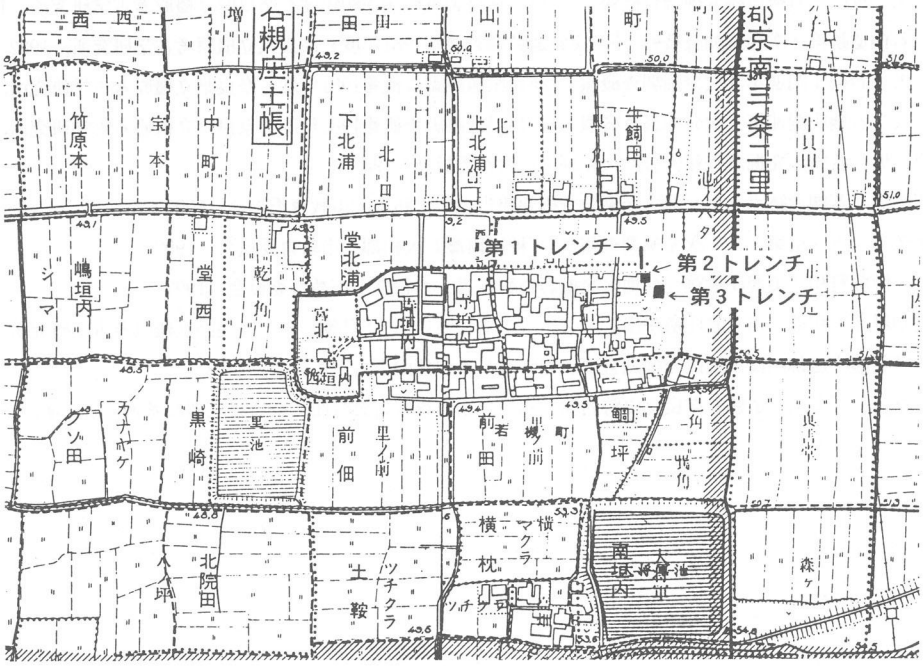



図６　トレンチ配置図（Ｓ：１／5,000）（奈良県立橿原考古学研究所編『大和国条里復原図』に加筆）

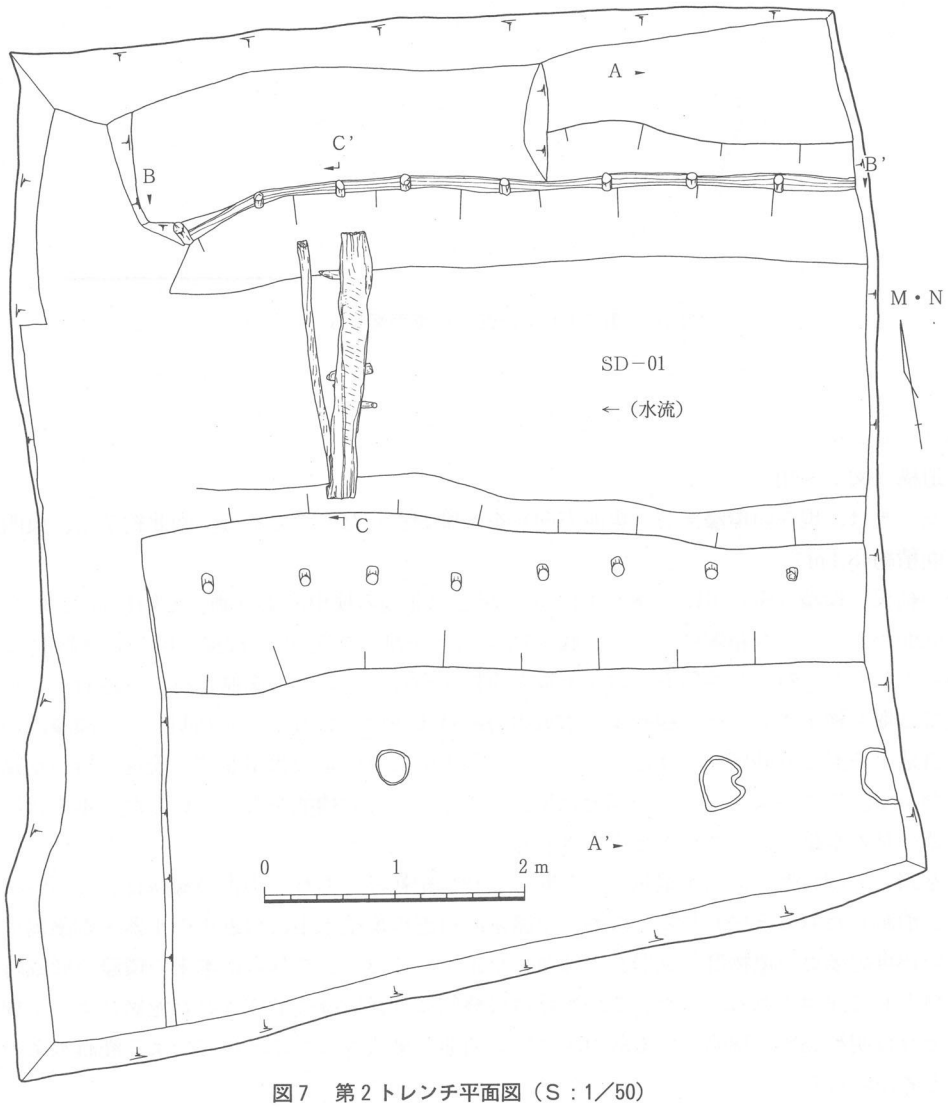



図7　第2トレンチ平面図（S：1／50）

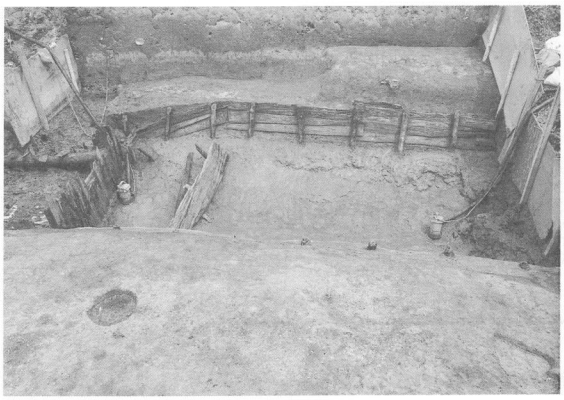


図8　第2トレンチ完掘状況写真（南より）

図9　第2トレンチ ＳＤ－01完掘状況写真（東より）

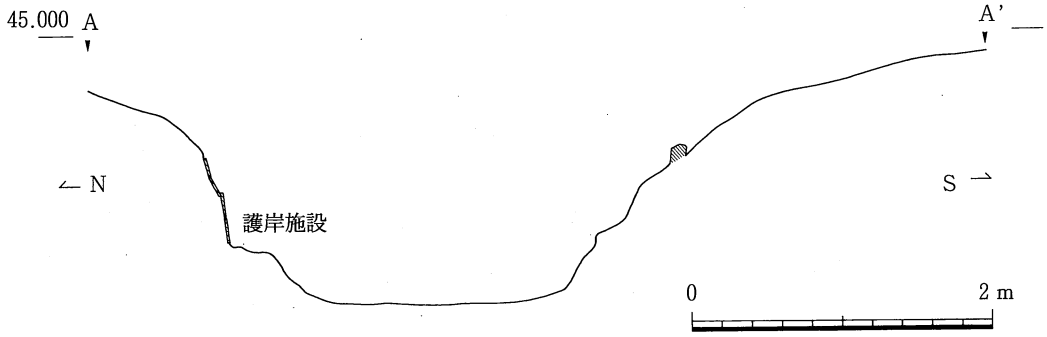



図10　第２トレンチSD－01断面図（S：1／50）

3　第２トレンチ

（１）遺構（図７～10）

本トレンチは、現在の環濠部分（東西方向）を掘削調査したものである。南北約７ｍ、東西約７ｍを測る（面積約48.1㎡）。

調査の結果、環濠（SD－01）の幅は約４ｍ、深さは北側の検出面より測って約1.5ｍである。断面の形状は底面がフラットな箱堀状を呈し、底面幅は1.7ｍを測る（図10）。環濠の南北両側斜面には護岸施設が検出されたが、特に北側斜面には土留板も良好に遺存していた（南側は杭のみ遺存）。また、調査区西側では堰も検出され、その観察より水流の方向は東→西であることも判明した。環濠内の堆積土はシルト質粘土を混じる砂層を主体とするもので、基本的には一定の水量並びに流速を持つ水路であったことがわかる。先述のように、この部分は現在は水路としての機能を失っているが、本来は周辺耕地を潤すための基幹水路であったものと推定される。

この水路の掘削時期は、出土遺物から判断して18世紀初頭であり、中世の濠跡は、この時に完全に破壊され、消滅したものと思われる。なお、水路基底付近の堆積土中には近世の土器・陶磁器に混ざって一定量の13世紀後葉の遺物群（瓦器、土師皿）が出土しており、これらは本来の環濠の形成時期を伺わせる資料として注目される。また、この水路は最終的に近代以降に形成された泥層によって埋まっているが、それは明治28年（1895）に集落の西に里ノ前池が築造されたことなどによる灌漑水系の変化に伴うものと考えられる。

**護岸施設**（図11）

環濠北側斜面の護岸施設は、幅10～15㎝、長さ約２ｍの板材を横に５段積み、それを約70㎝間隔に打たれた縦杭で留めた構造を持つ。高さは、残りの良い東半部分で約55㎝を測る。なお、西側部分は土圧により溝の中心に向かって湾曲し、板も本来の位置を移動していた。

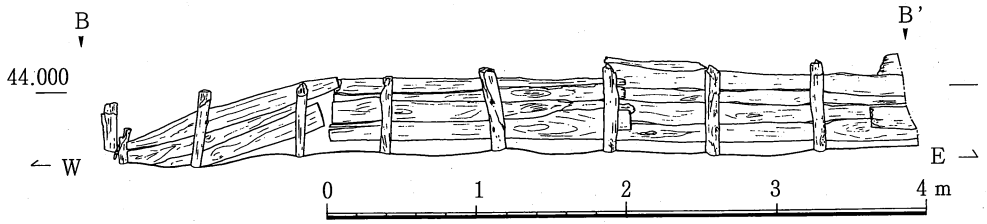



図11　第２トレンチSD－01護岸施設立面図（S：１／50）

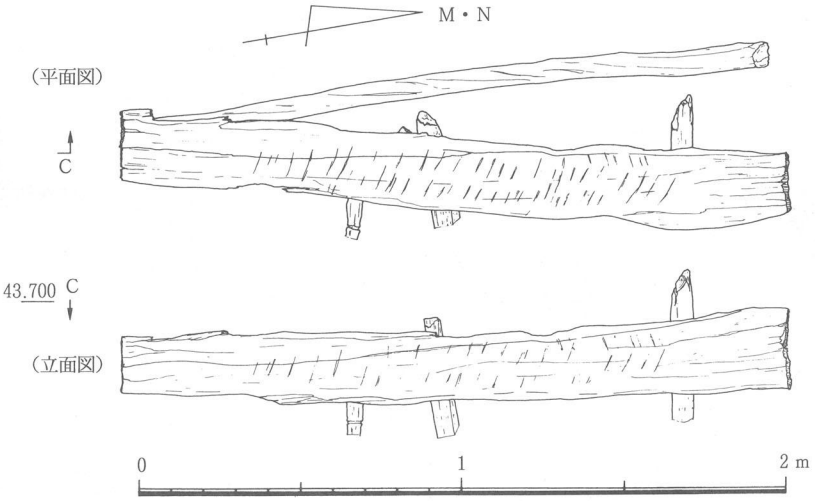



図12　第２トレンチSD－01堰平面図および立面図（S：１／20）

図13　第２トレンチ SD－01堰背面状況写真（南西より）

**堰**（図12・13）

幅約25㎝、長さ約205㎝の板材を、水流（東→西）に対して背面（西側）から３本の杭で留め、さらにその背後を板材と同程度の長さの丸太材で支える構造を持つ堰である。杭の毀損状況から判断して、さらに数枚、上に板を積む構造であった可能性が高い。なお、板材の上端部が東に大きく傾いていたので、水流の方向は前記したように東から西ということがわかる。ここでダムアップされる水は調査地北側の耕地（水田）に供給されたものと考えられるが、その導水路は今回のトレンチ内では検出されていない。

（２）遺物　※個々の遺物の詳細は、観察表の記載によられたい。

**SD－01表土層および野井戸出土遺物**（図14～16）

調査地は先述のように、現在は環濠が水路としての機能を果たしていない部分に設定したものだが、その環濠の機能停止以後の堆積土と考えられるのが、この表土層である。また、「野井戸出土」としたものは、主にこの表土層が後世（昭和期）の灌漑用の井戸内に流入したものなので、ほぼ同じ性格を持つものと考えてよい。なお、この部位の環濠が機能を失った主たる要因としては、先述のとおり集落西端の里ノ前池の築造が挙げられる（明治28年＝1895）。このことを裏付けるように、出土遺物中には型紙摺の染付（１）などが見られ、また、明治年間に堀越商店が販売したヒット商品である「ホーカー液」[4]の容器（７）が出土している。また、従来出土事例に乏しいため明確な時期観を欠いていた赤膚焼（有印銘）を持つものが当該層より２個体出土しており（４・13）、中でも13は幕末の名陶工、奥田木白（1800～1871）の印銘を有する[5]。方形の高台には切り込みを有し、平面形は楕円状となるものと思われる。なお、木白銘を有する赤膚焼の出土は堺環濠都市[6]遺跡に次いで２例目である。また、４は赤膚の瓢印を有するタバコ入れである[7]。

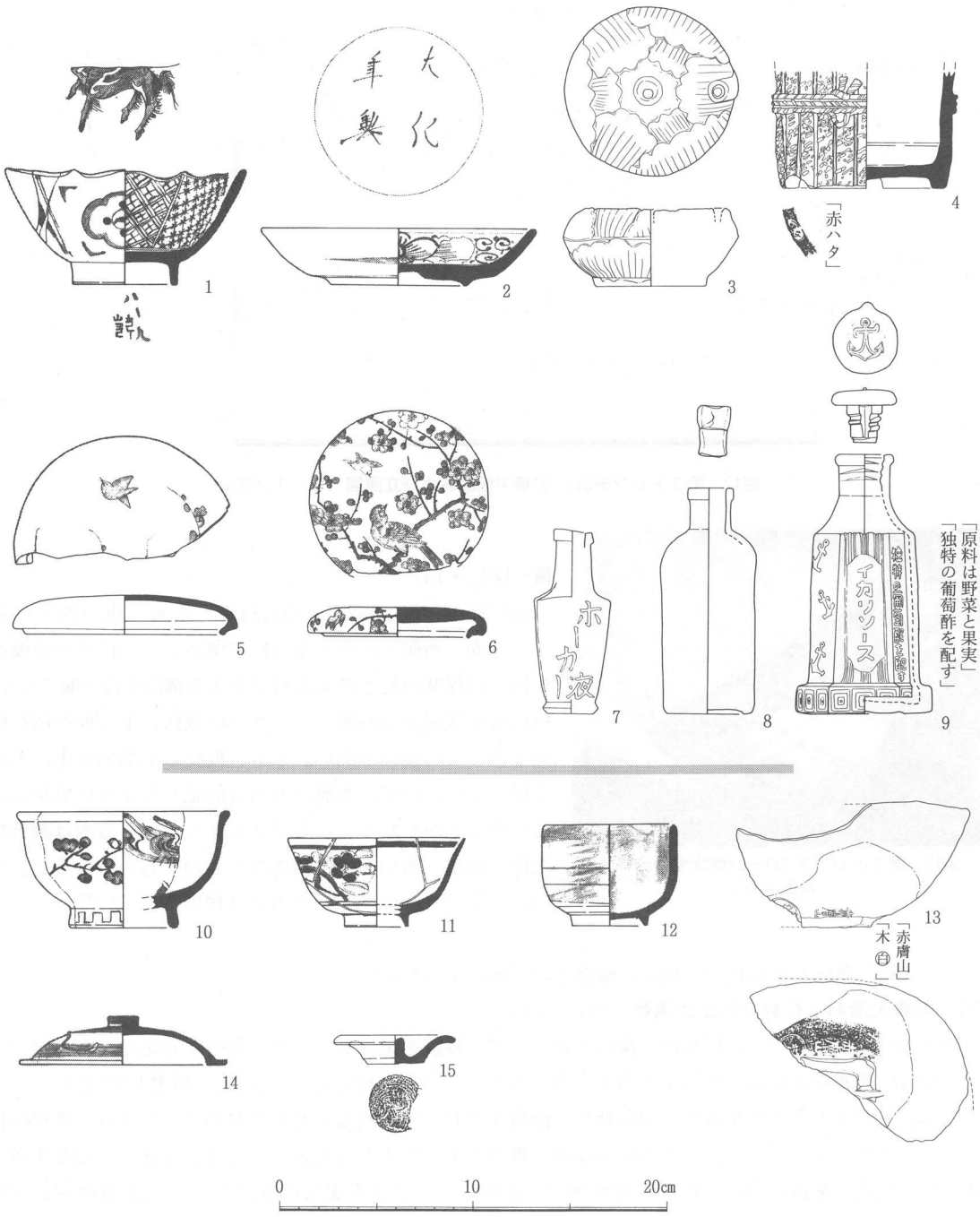



図14　第２トレンチSD－01表土層（１～９）および野井戸（10～15）出土遺物実測図（S：１／３）

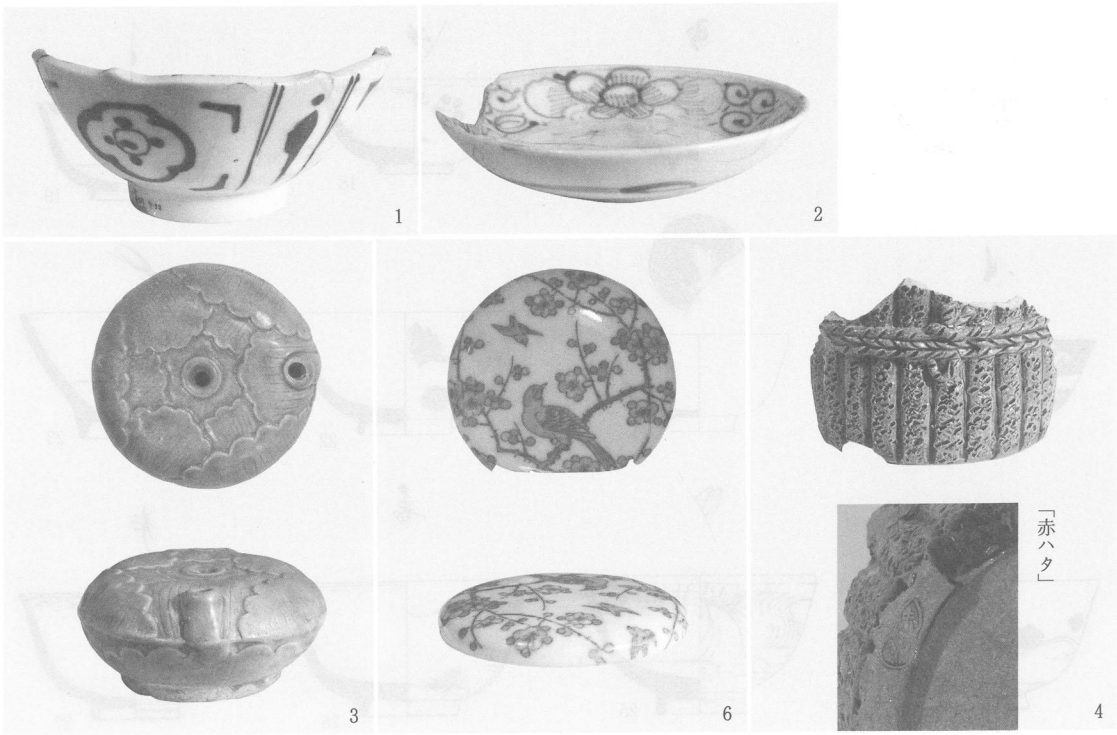



**図15　第２トレンチSD－01表土層出土遺物写真**

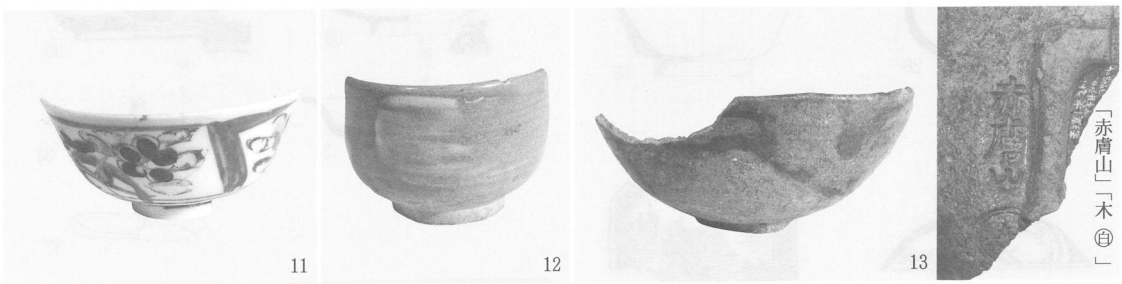



**図16　第２トレンチ野井戸出土遺物写真**

**SD－01上層出土遺物**（図17・18）

今回の調査では、調査面積の制約から壁面観察等に基づく厳密な分層発掘は成し得ていない。したがって遺物の取り上げに際しての分層は多分に感覚的な部分もあるが、一応、出土遺物の時期的まとまりは指摘し得るように思われる。本層出土遺物は、幕末～明治を主体とするものであり、その点では表土層出土遺物と近似した状況も示すが、遺物組成中にガラス瓶が含まれないなど、やや古い様相を持っている。図示した遺物中、16・17は型紙摺による染付碗、18は瀬戸産の染付磁器である。端反碗が主体を占める中、23のような広東碗も出土している。なお、30・32は赤膚焼の印銘（瓢印）を持つ。

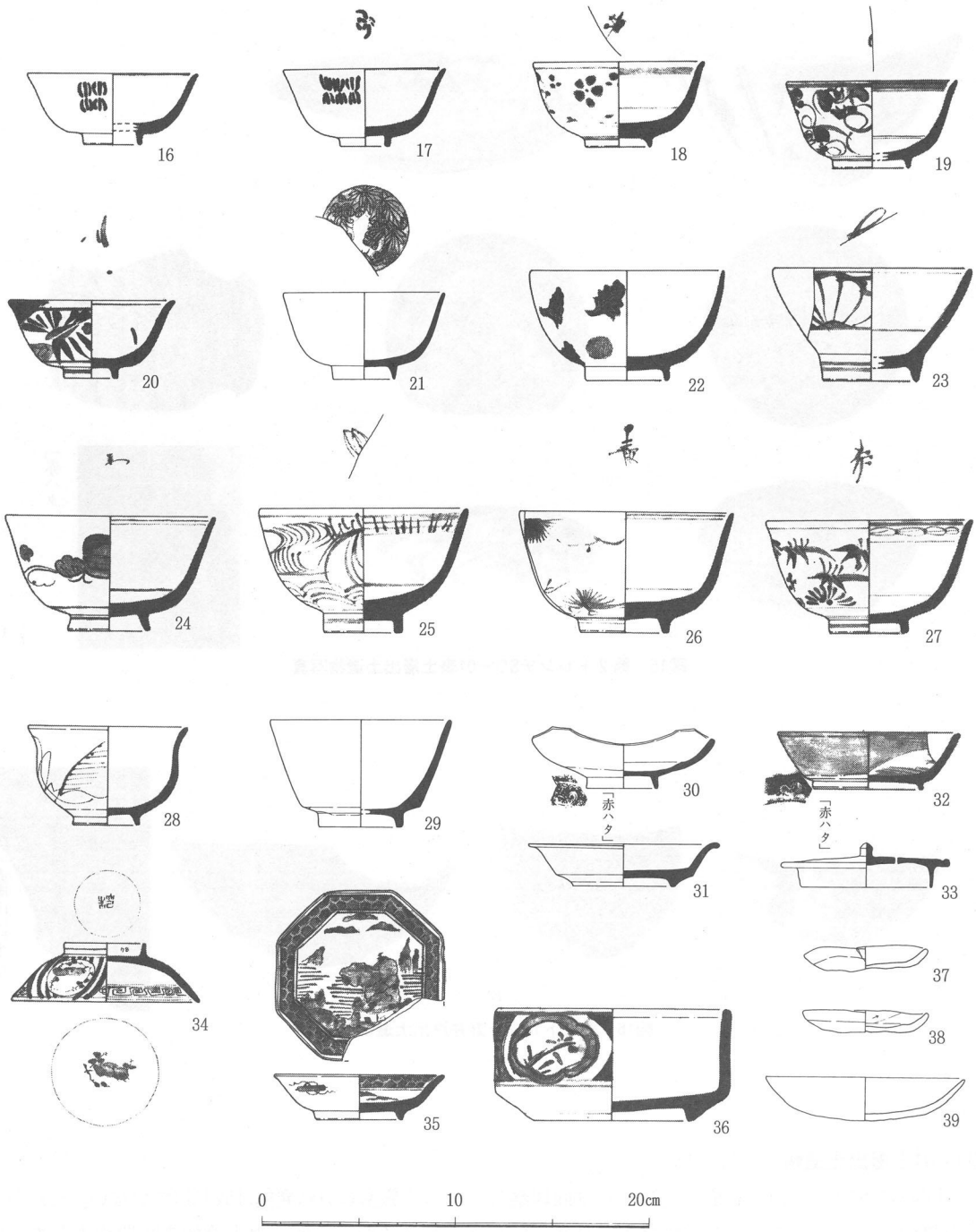



図17　第２トレンチSD－01上層出土遺物実測図（S：１／３）

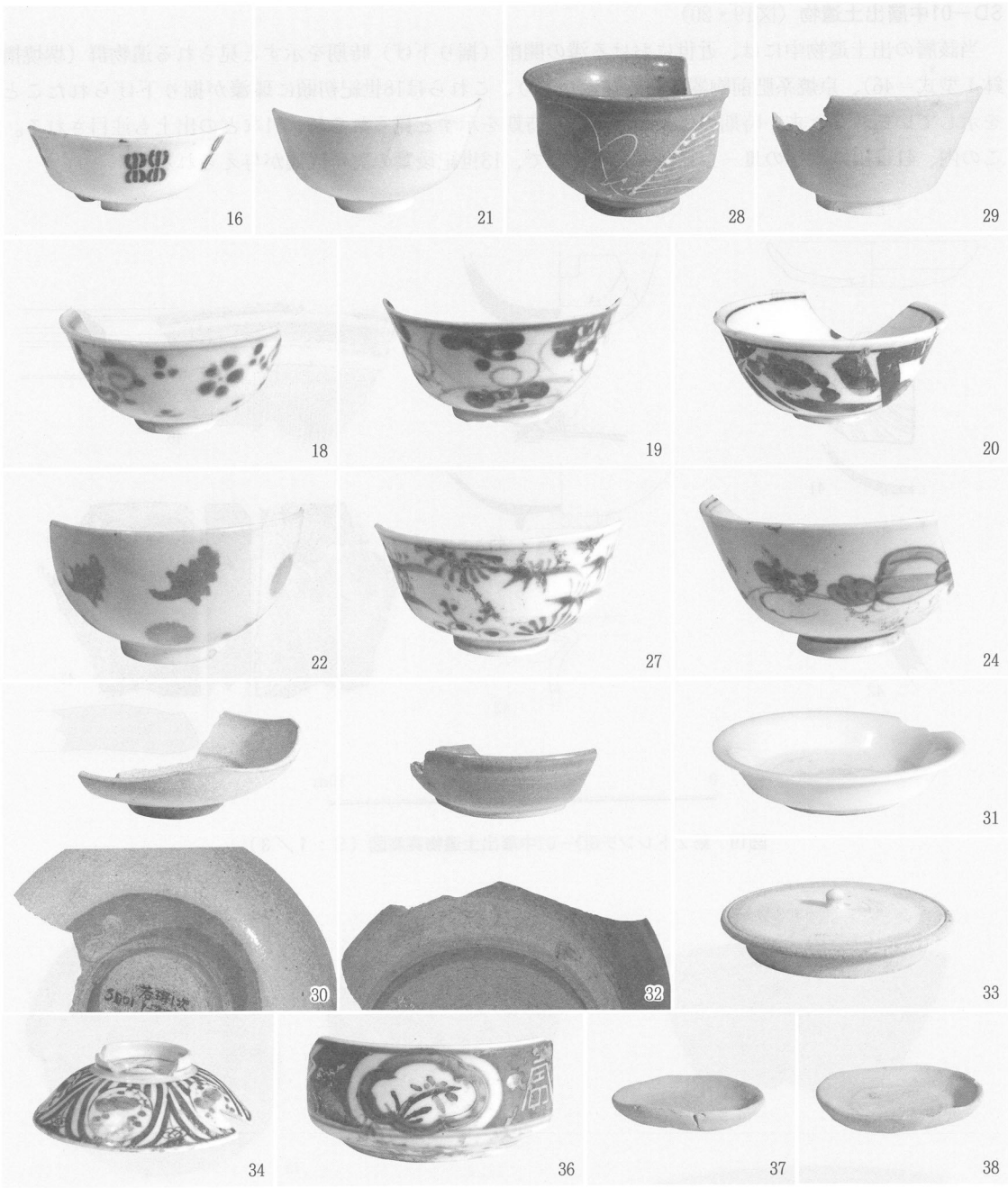



図18　第２トレンチSD－01上層出土遺物写真

**SD－01中層出土遺物**（図19・20）

当該層の出土遺物中には、近世における溝の開削（掘り下げ）時期を示すと見られる遺物群（堺焼摺鉢Ⅰ型式[8]＝46）、京焼系肥前陶器（45）などがあり、これらは18世紀初頭に環濠が掘り下げられたことを示している。また古い時期の環濠の（開削）時期を示すと見られる40、41などの出土も注目される。この内、41は川越編年のⅢ－D期[9]にあたるもので、13世紀後葉の実年代観が与えられる。

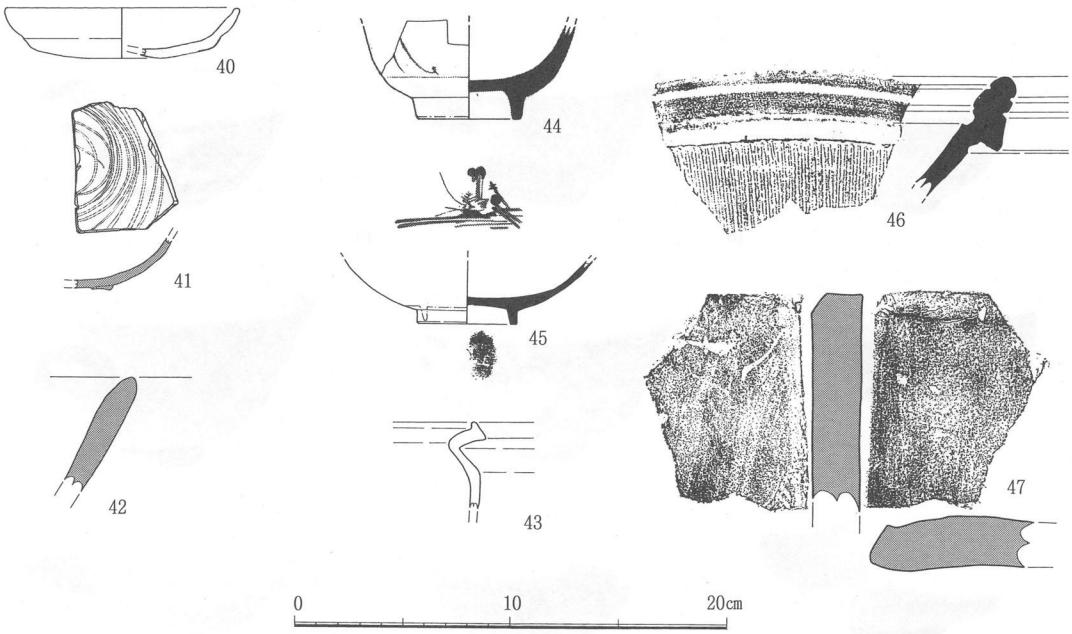



図19　第２トレンチSD－01中層出土遺物実測図（S：１／３）

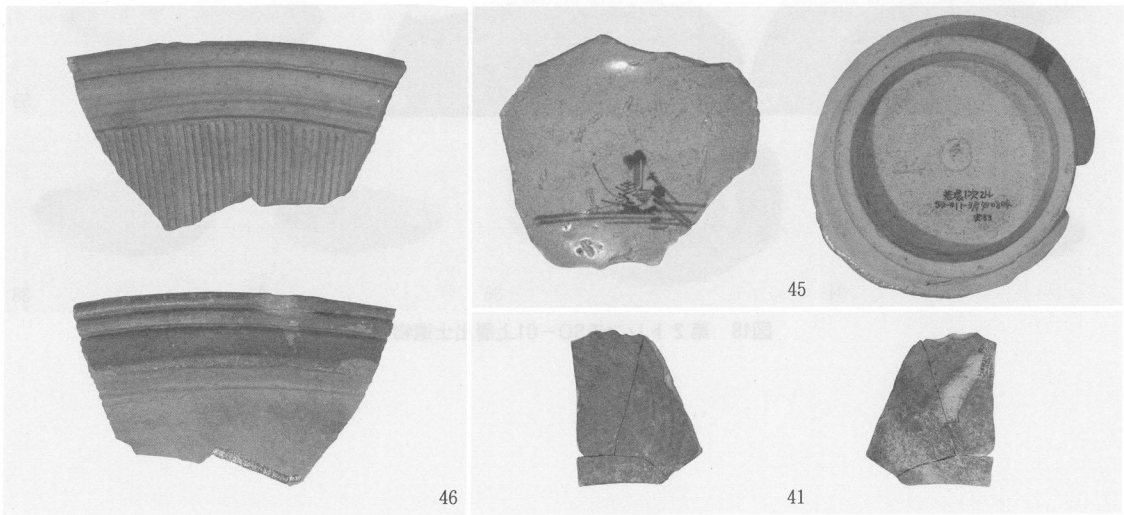



図20　第２トレンチSD－01中層出土遺物写真

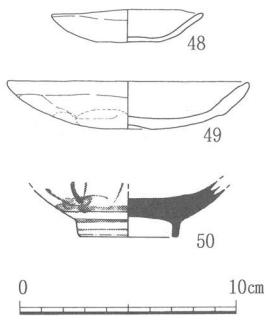



図21　第２トレンチSD－01下層出土遺物実測図（S：1／3）

**SD－01下層出土遺物**（図21・22）

基本的に先述の中層出土遺物と様相は同じであり、主に18世紀初頭の遺物が出土している。これらは中層の出土遺物と同様、近世における環濠の掘り下げ時期を示しているものと考えられる。なお、図化していないが、13世紀代の遺物も中層と同様に若干出土している。

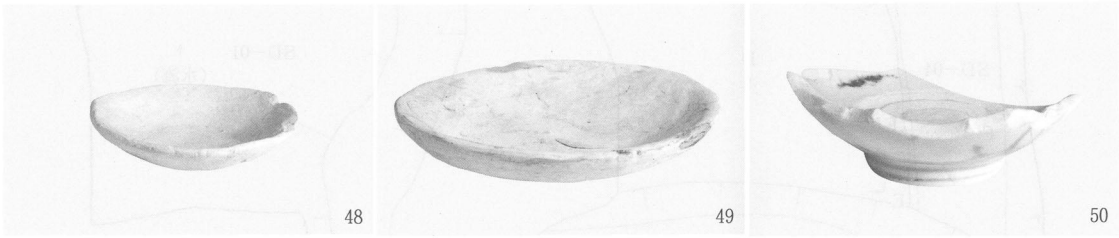



図22　第２トレンチ SD－01下層出土遺物写真

4　第３トレンチ

（１）遺構（図23～25）

本トレンチは、第２トレンチと同じく、現状の環濠部分（南北方向）を発掘調査したものである。南北約6.5ｍ、東西約７ｍを測るが、環濠部分の調査は安全上の理由により部分的に限られたものとなった。調査面積は約42.1㎡である。

調査の結果、環濠（SD－01）は、第２トレンチと同様に18世紀初頭に水路としての大規模な改修がなされていた。調査区の制限により水路の東斜面は検出できなかったが、幅は3.5ｍ以上となる。深さは約1.5ｍで、第２トレンチと同じである（図26）。ただし、底面の標高は第２トレンチでは43.200ｍ、第３トレンチでは43.250ｍとなることから、水流の方向は南→北と推定される。なお、第２トレンチで見られたような護岸施設は、ここでは検出されていない。

また、この第３トレンチでは、環濠SD－01に接続する溝（SD－02）が検出された。本遺構中より13世紀後葉の瓦器・土師皿がまとまって出土しており、その機能時期もしくは廃絶時期の一端を明確に押さえることができた（後述）。本遺構は環濠SD－01に対してほぼ直角に接続しており、それと密接な関連を有するものと思われるが、この場合、環濠自体の初現時期も13世紀後葉を前後するものとの推定が成り立つ。また、本遺構に接続する浅い溝状の遺構（SD－04）からも同時期の瓦器や土師皿が大量に一括廃棄された状態で検出されており、この推定を裏付ける形となっている。いずれにせよ、13世紀後葉が現在の若槻集落の形成において大きな画期をなした時期であったことは、SD－02及びSD－04の調査で明らかとなったものといえよう。なお、このSD－02を嚆矢とする地割は、少なくとも近世までは踏襲されていたようで、溝自体は18世紀前葉に再度堀り込まれている。

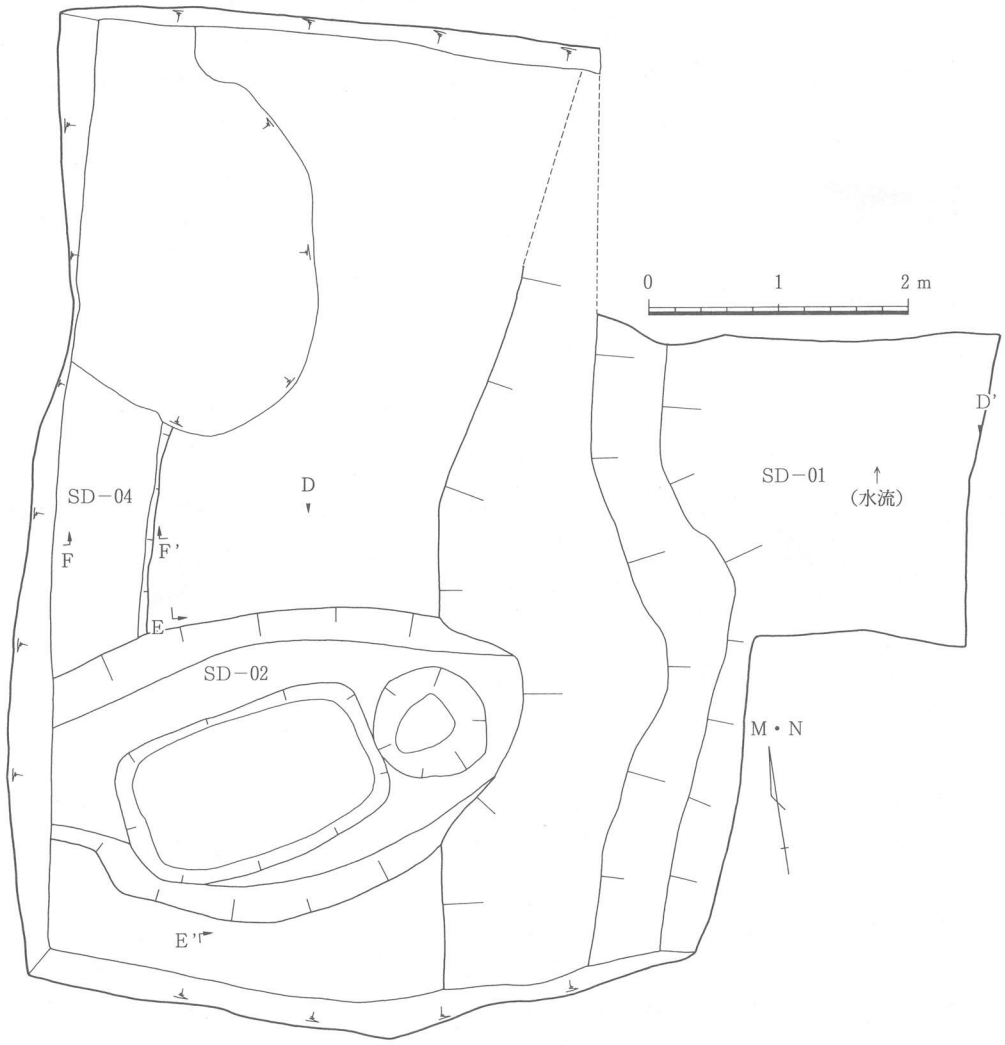



図23　第３トレンチ平面図（Ｓ：１／50）

図24　第３トレンチ完掘状況写真（南西より）

図25　同左（北西より）

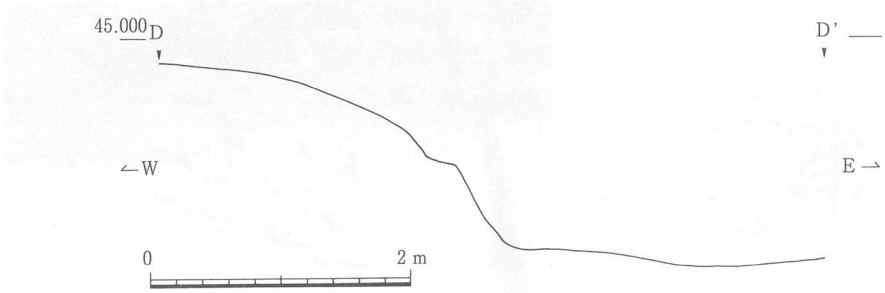
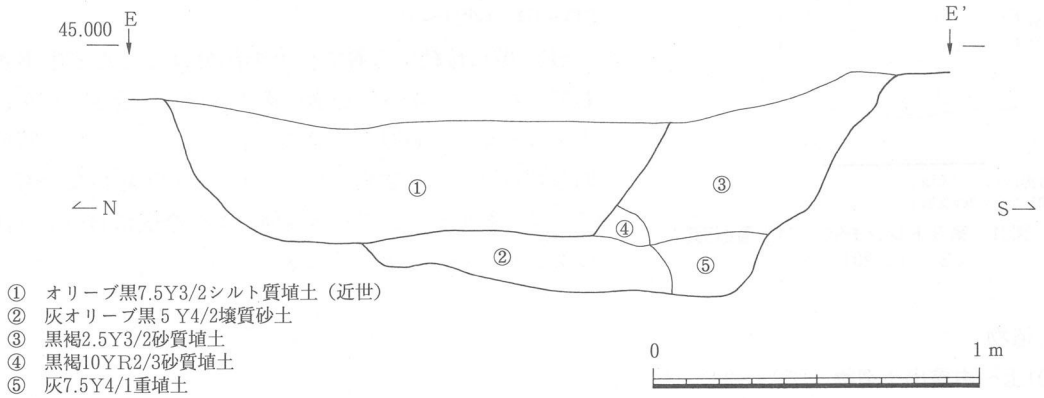



図26　第３トレンチSD－01断面図（S：１／50）




① オリーブ黒7.5Y3/2シルト質埴土（近世）
② 灰オリーブ黒５Y4/2壌質砂土
③ 黒褐2.5Y3/2砂質埴土
④ 黒褐10YR2/3砂質埴土
⑤ 灰7.5Y4/1重埴土

図27　第３トレンチSD－02土層断面図（S：１／20）

図28　第３トレンチSD－02土層堆積状況写真（西より）

SD－02（図27・28）

環濠（SD－01）に接続する溝状遺構である。幅は最大で約2.5ｍ、深さは南側の検出面より約65㎝を測る。本遺構の②～⑤層中より比較的多量の瓦器・土師皿（13世紀後葉）が出土した。その性格は調査面積の制約から明確にし難いが、宅地割の溝の可能性が高いように思われる。なお、この溝は18世紀に再度同じ場所を掘削されている（図27－①層）。

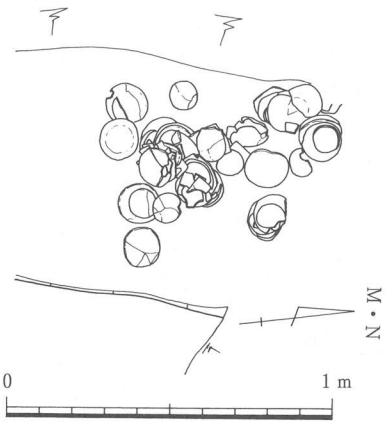



図29　第３トレンチSD－04遺物出土状況実測図（S：１／20）

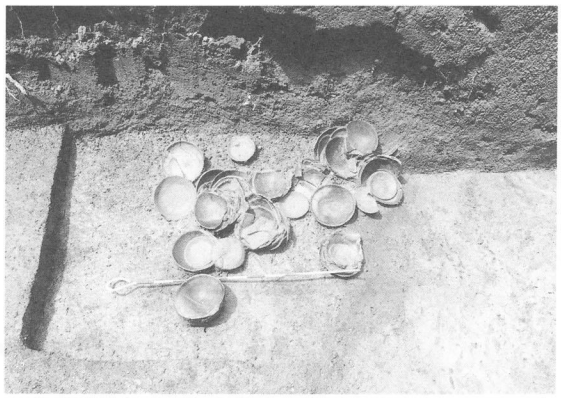
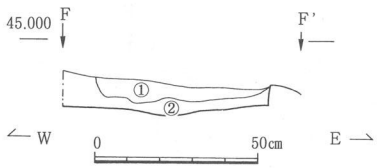


図30　第３トレンチSD－04遺物出土状況写真（東より）




① 灰黄褐10YR4/2重埴土
② 暗褐10YR3/3砂質埴土

図31　第３トレンチSD－04土層断面図（S：１／20）

**SD－04**（図29～31）

SD－02に接続する溝で、上半部分はほとんど削平されていた。したがって遺構の深さは10㎝に過ぎないが、中から瓦器・土師皿が大量に出土した。これらには時期的な幅はほとんど認められず、すべて13世紀後葉のものである。おそらく、これらは何らかの祭儀において一括投棄されたものと考えられる。[10)]

（２）遺物

**SD－01上～中層出土遺物**（図32・33）

出土遺物は、中世のものを除くと18世紀初頭～近代にまで及び、非常に時期幅がある。先述のように、第３トレンチでは遺構底面まで掘削できた範囲がごく狭いので、層序の確認はさらに困難であり、埋没時期の遺物に機能時期の遺物が一部混入したためである。しかし、ここで見るものについては、おおむね幕末～明治のものが多い。57・58は長崎県波佐見窯の鉄絵の磁器製品で、18世紀末頃の特徴をもつ。また、69や70は中世（14～15世紀）の遺物である。近世の環濠の前身である中世環濠が機能した時期を示すものであろう。

**SD－01下層出土遺物**（図34・35）

18世紀代の遺物を中心とした一群である。ただし、堺焼摺鉢（77・78）はⅡ型式まで下るもので、第２トレンチの中～下層とはやや様相が異なる。なお、ここでもやはり15世紀頃の土釜が見られる（75）。

**SD－02出土遺物**（図36・37）

下層出土の瓦器椀（86・87）は、13世紀後葉（川越編年Ⅲ－Ｄ期）のもので、土師皿（81～85）もそれと同時期のものである。なお、先述のように本遺構は18世紀に再掘削されており、その層序から出土した遺物が88～90である。

**SD－04出土遺物**（図38～40）

土器の出土量は調査面積に比して非常に多いが、時期的な幅はほとんど見られない。瓦器はいずれも13世紀後葉（川越編年Ⅲ－Ｄ期）のもので、土師皿もこの時期のものである。なお、その他の遺物はここでは出土していない。

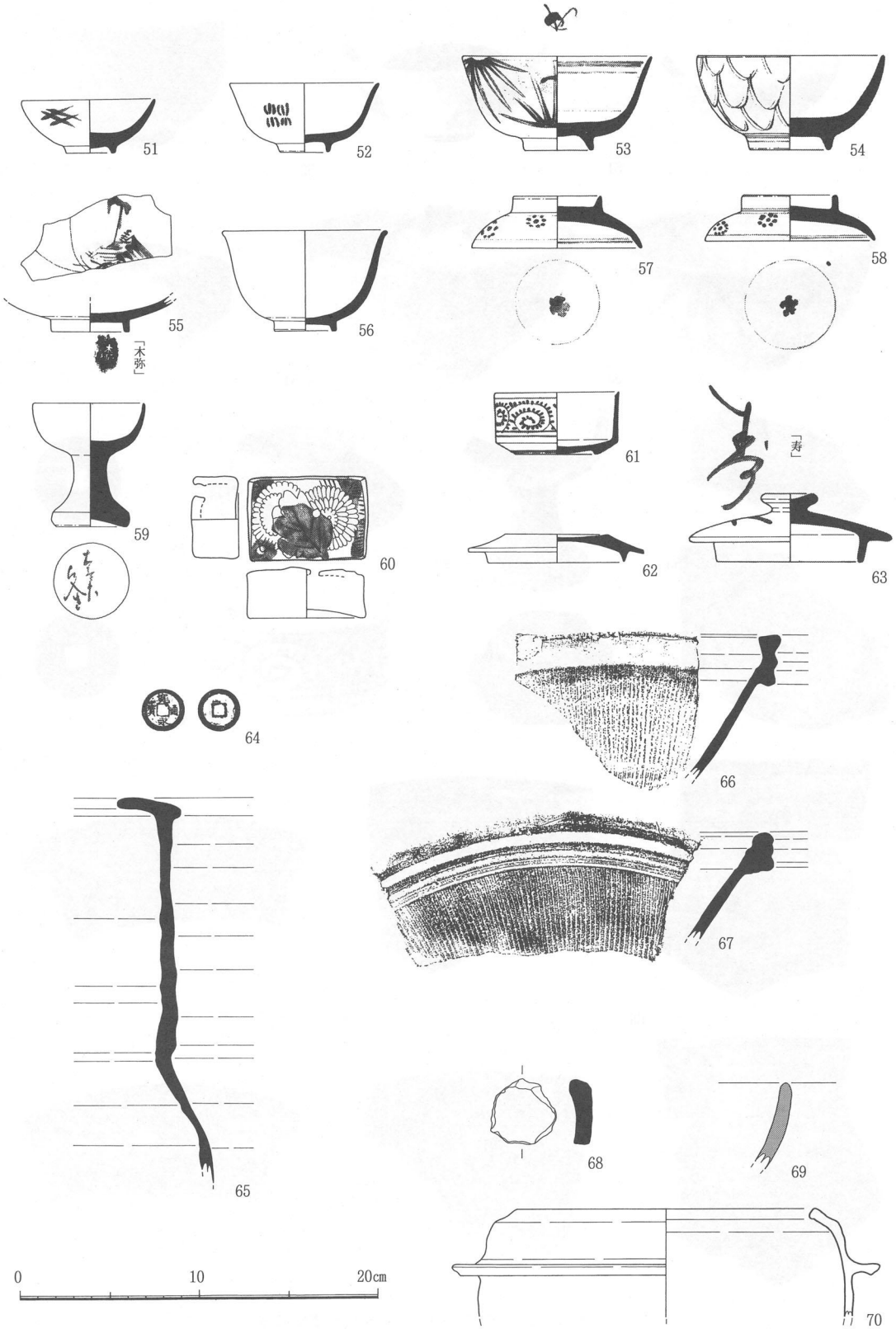



図32　第３トレンチSD－01上～中層出土遺物実測図（S：１／３）

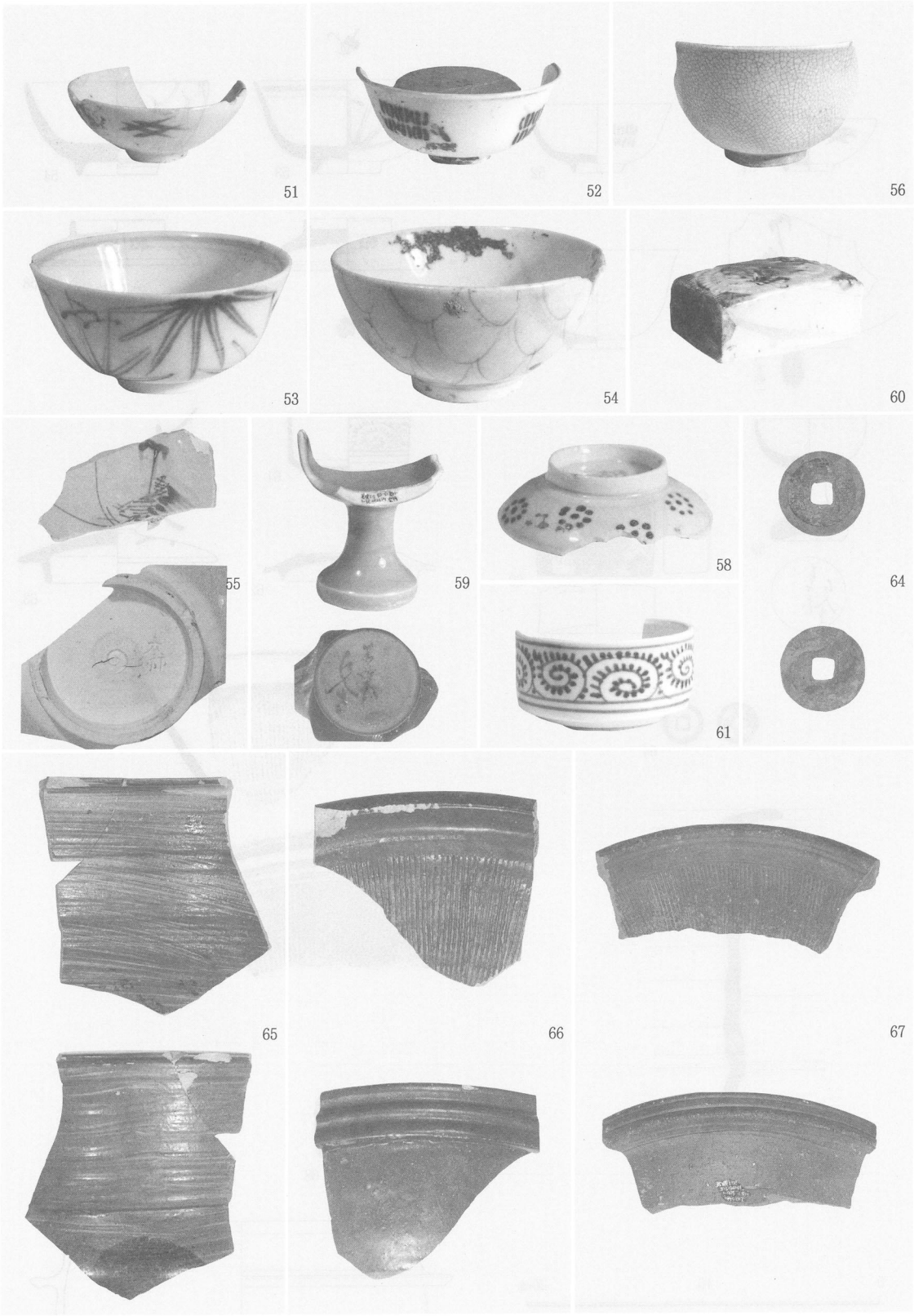



図33　第３トレンチSD－01上～中層出土遺物写真

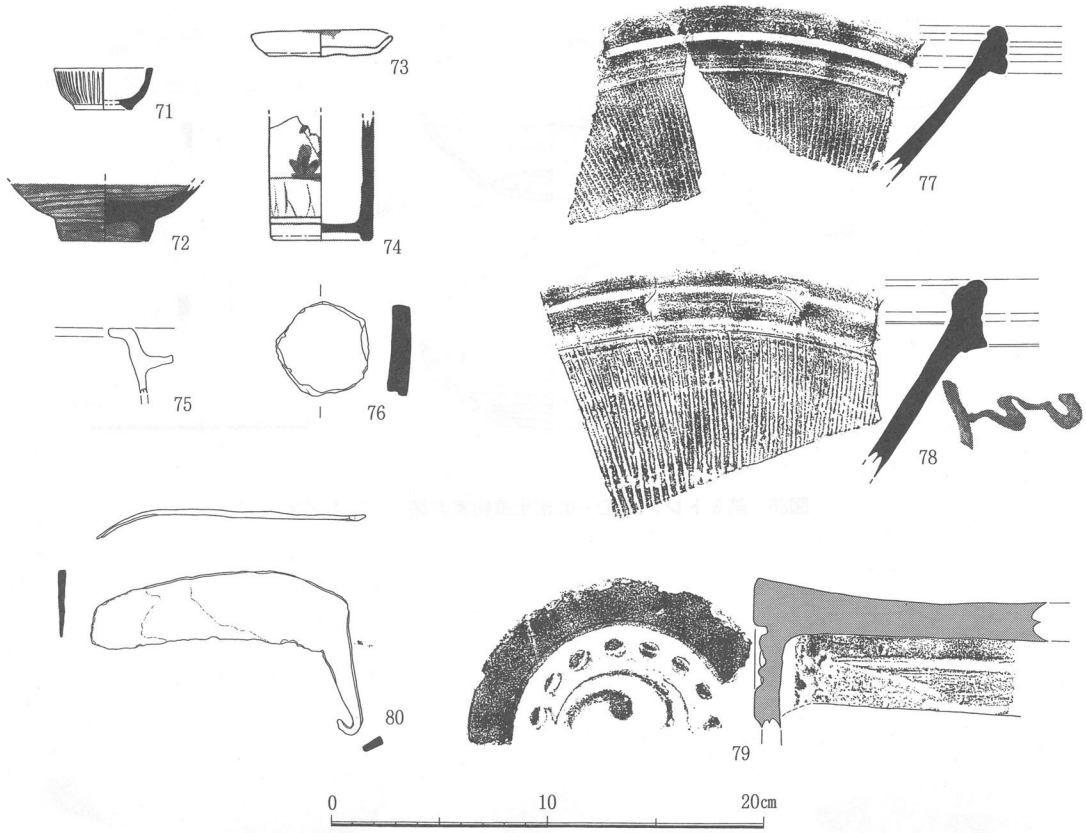



図34　第３トレンチSD－01下層出土遺物実測図（S：１／３）

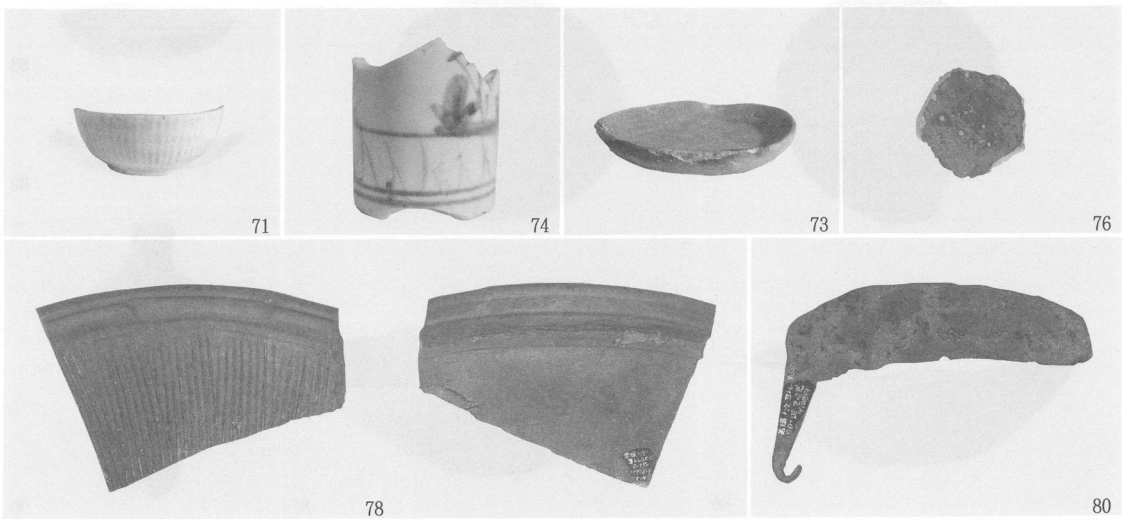



図35　第３トレンチSD－01下層出土遺物写真

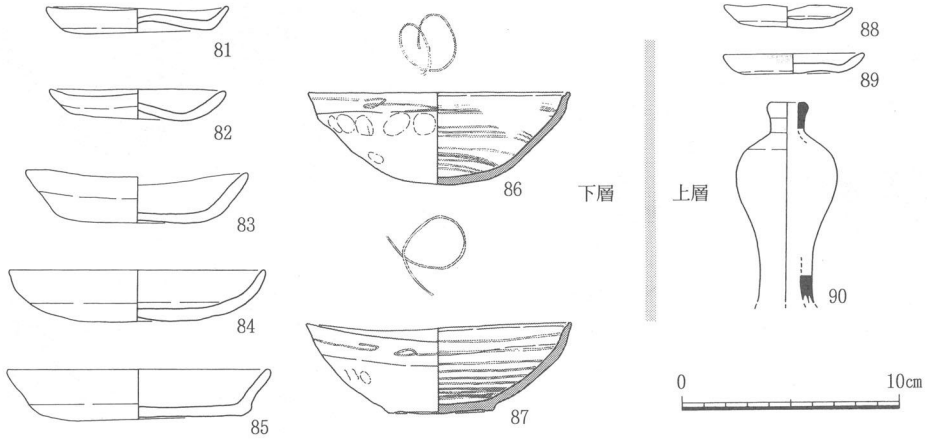



図36　第３トレンチSD－02出土遺物実測図（S：１／３）

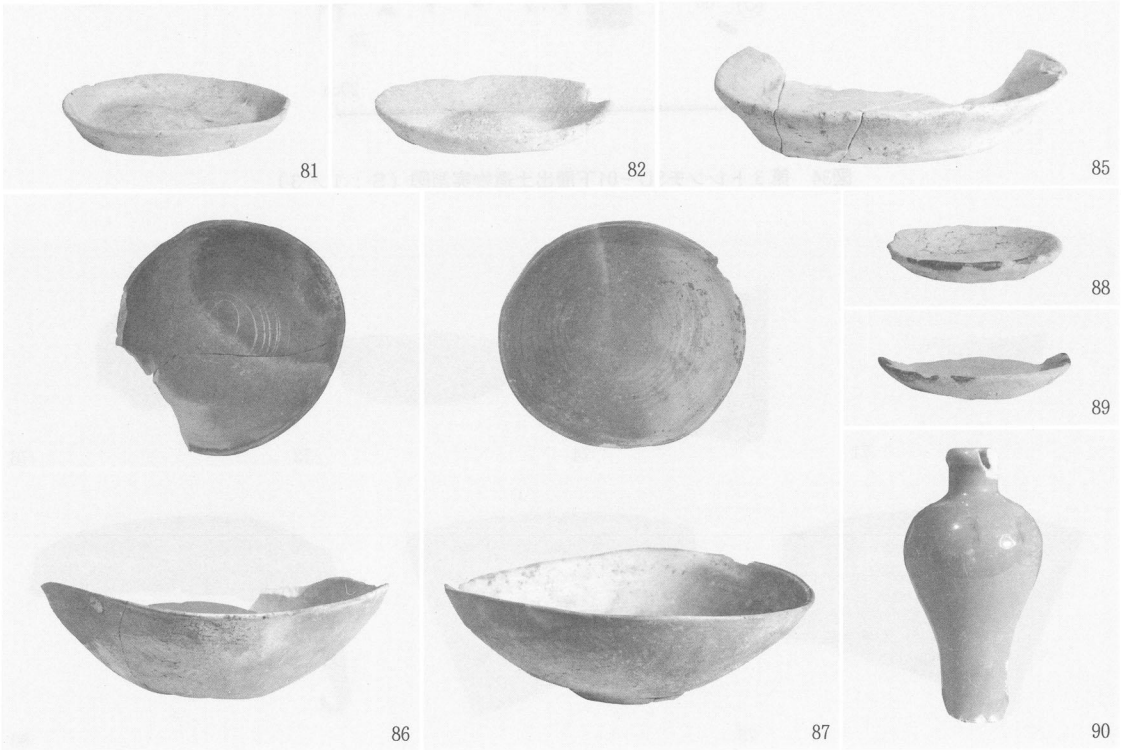



図37　第３トレンチSD－02出土遺物写真

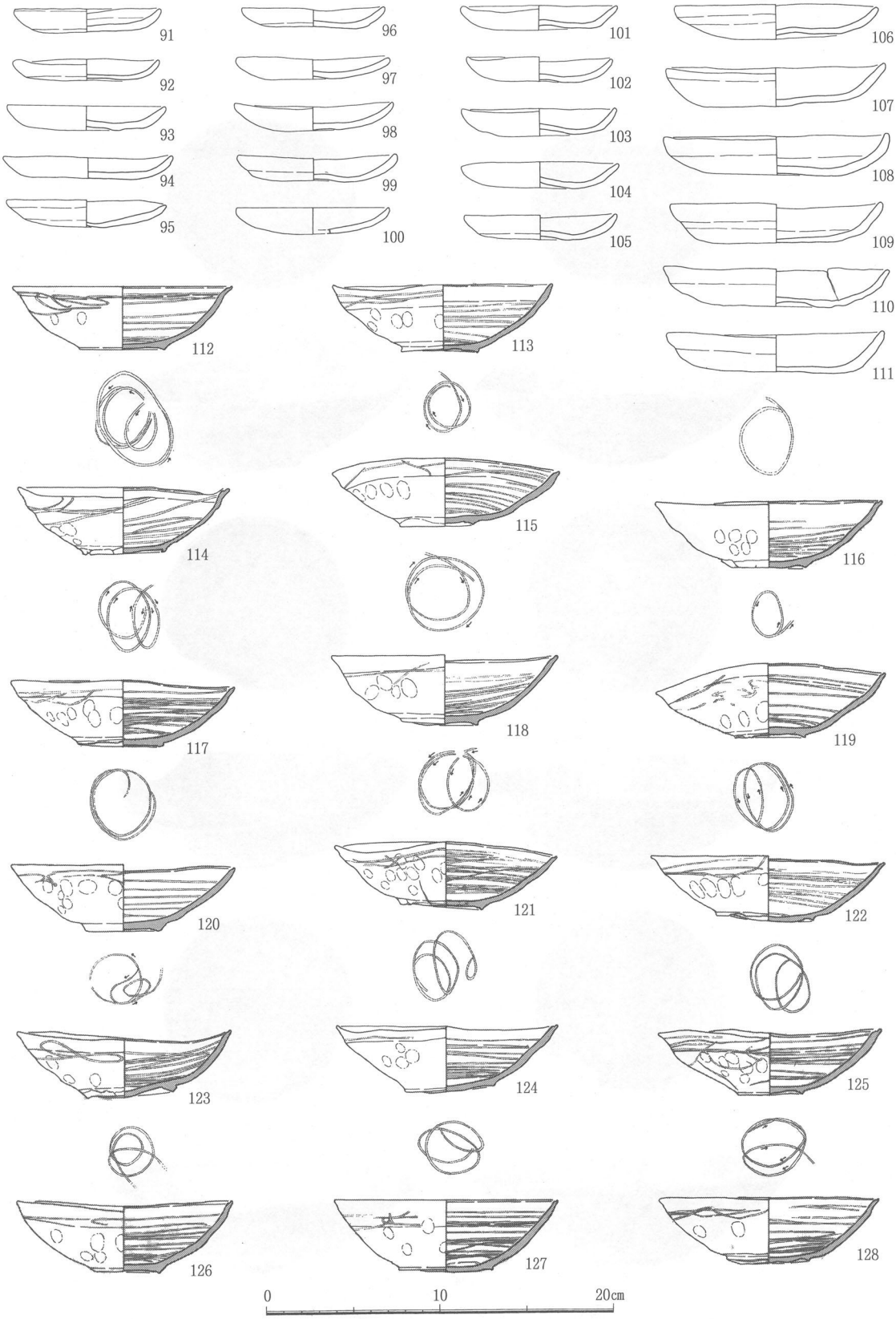



図38　第３トレンチSD－04出土遺物実測図（S：１／３）

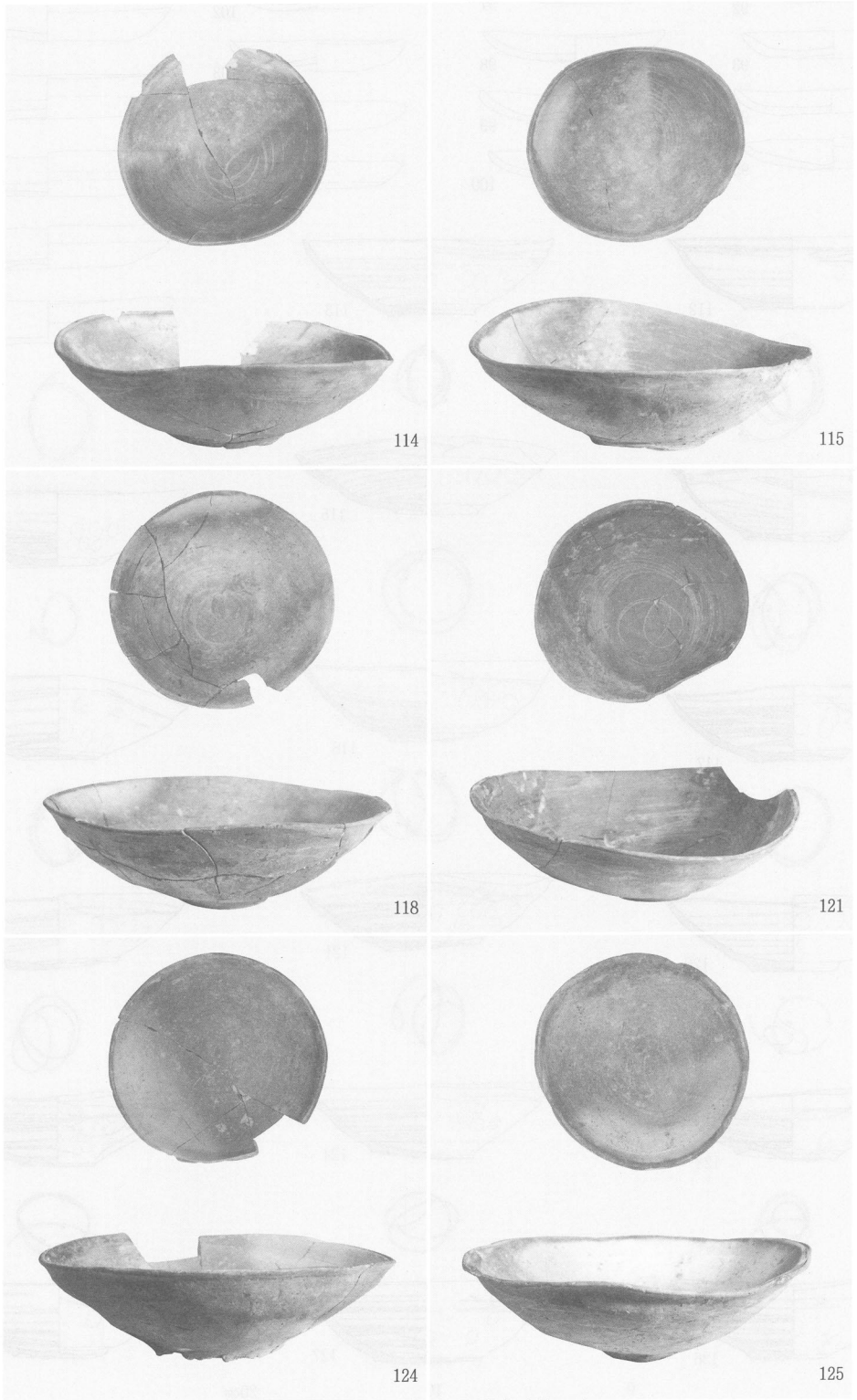



図39　第３トレンチSD－04出土遺物写真１

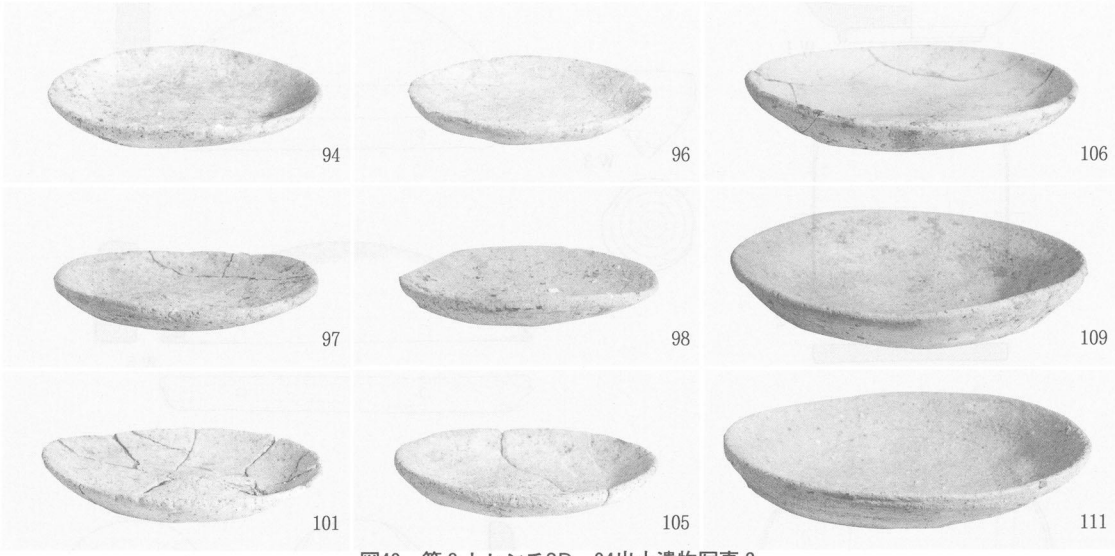



**図40　第３トレンチSD－04出土遺物写真２**

**SD－01出土木製品**（図41・42）

ここでは第２トレンチ、第３トレンチ出土（いずれもSD－01出土）の木製品を一括して報告する。出土した代表的な木製品としては、内外面共に朱漆塗の漆器椀（Ｗ１）、轆轤引き成形の独楽（Ｗ３）、子供用と思われる下駄（Ｗ７）などがある。また、Ｗ４とＷ５は半月状の板材の直線端部に穿孔した製品である。何らかの組み物の一部と想定されるが、具体的な用途などは不明である。なお、ここに紹介した木製品の時期は、いずれも近世（中期以降）と考えられる。

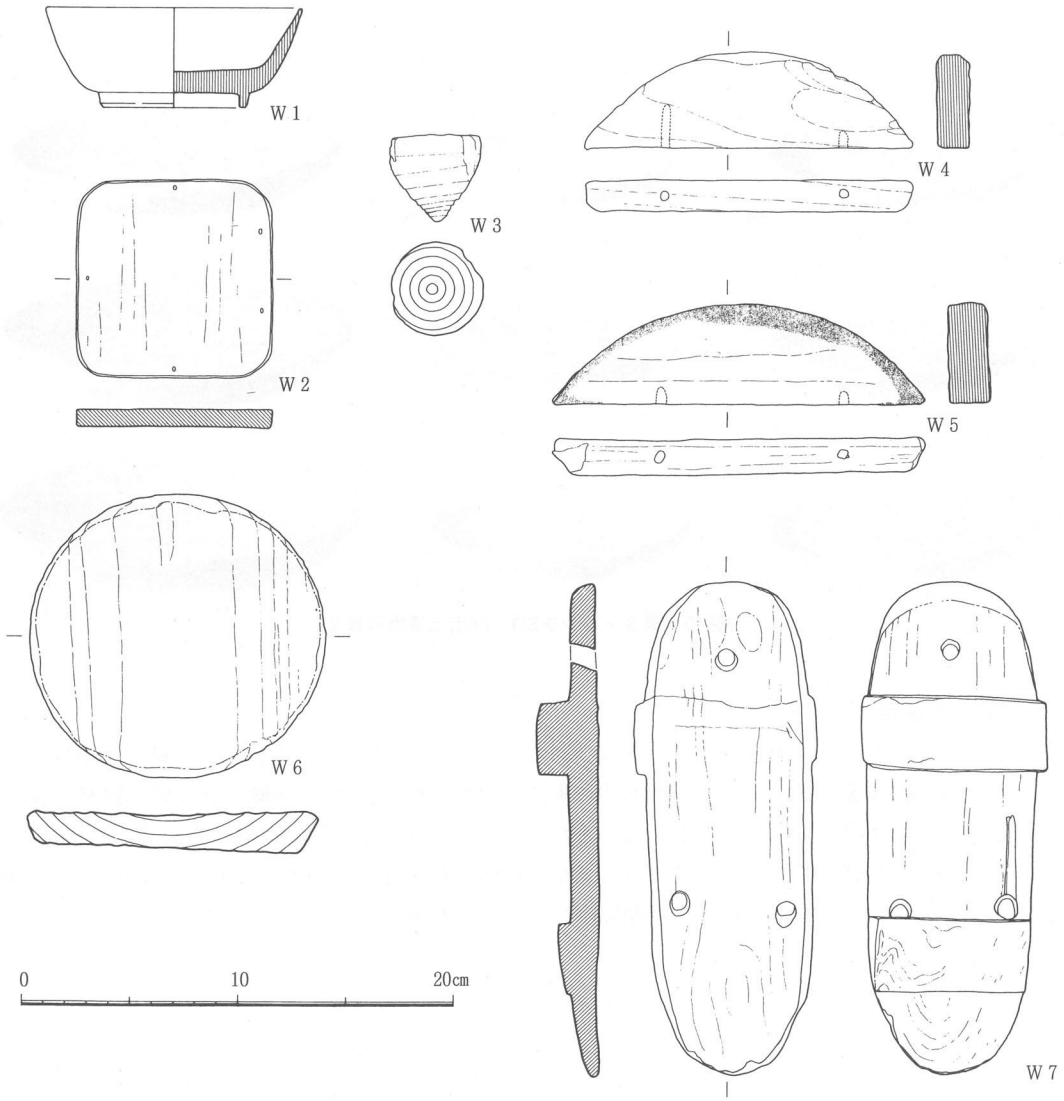



図41　SD－01出土木製品実測図（S：1／3）

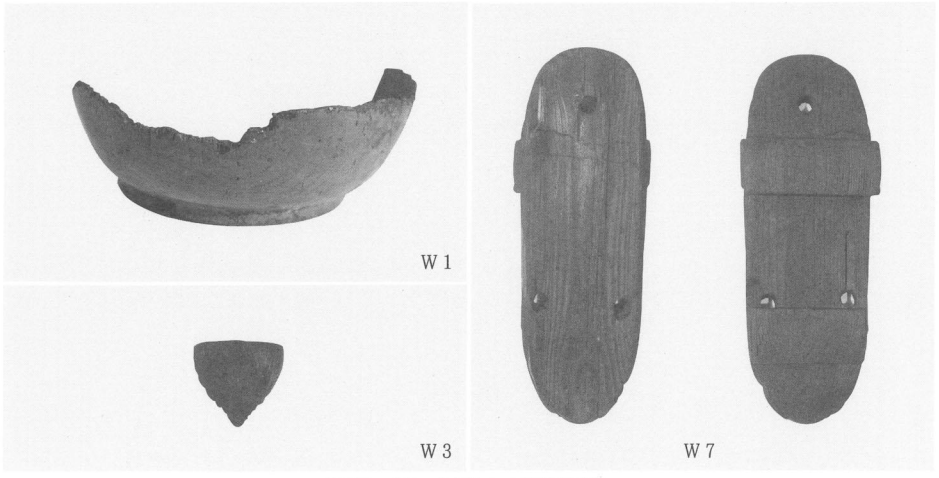



図42　SD－01出土木製品写真

# Ⅳ　まとめ

以上のように、今回の調査では、環濠（SD－01）自体は18世紀前葉には幅３ｍ以上の大規模な基幹水路として再掘削されており、中世の環濠は検出できなかった。中世の環濠は近世の濠普請に際して完全に破壊されていたことから、その幅は３ｍ前後と推定される[11]。ただし、第３トレンチにおいて検出されたSD－02などから、環濠及び集落の初現時期に関しては、13世紀後葉に大きな画期が存在することが確認できた。また、近世環濠内から混入の形で出土した中世遺物（瓦器・土師皿）からも、環濠の成立年代は13世紀後葉にさかのぼる可能性はきわめて高いものといえる。

また、第２トレンチと第３トレンチで検出された環濠（SD－01）基底面のそれぞれのレベル差から、近世の環濠の水流は南→北（屈曲）→西という方向性を持つことが明らかとなった（明治28年の里ノ前池築造後は、今回の調査地付近は灌漑水路としての機能を失い、わずかに洪水時の排水路として機能していた）。したがって近世の基幹水路は東側の菩提仙川から大江集落の南側を通り、若槻集落の南東に接続した後、環濠部分を北上し、その後90度屈曲して集落の北縁を西流するものであった可能性が高い。こうした環濠集落相互を結ぶ形態の灌漑水系は、他地域の事例から見て、おそらく中世のそれを基本的に踏襲したものと推定されることから、若槻環濠の成立要因は、耕地の灌漑機能を主な背景としたものであったことが指摘し得る[12]（図43）。

さらに今回の調査では、コンテナ約25箱に及ぶ出土遺物中に室町～戦国時代の遺物はほとんど見られなかった。また濠の幅や深さも、奈良県内や周辺地域における近年の他の検出事例と比較した場合、少なくとも防御用のものとしては貧弱である（発掘資料によれば、居館の濠幅は５ｍを越えるものが普通である[13]）。したがって若槻環濠が「室町～戦国時代にかけて防御用の濠として形成された[14]」という見解は、今回の調査成果による限り根本的に見直す必要があるものと思われる。ただし、最近の筆者による研究では、集落全体を囲繞する環濠と、居館の周囲（通常は正方形のプランを持ち、一辺の長さが約50ｍである）を囲む「濠」とは区別すべきであるという見解を提示している[15]。またこの研究から、居館の濠が掘削もしくは幅広く掘り直されるのは、14世紀と15世紀に画期があることが明らかになった。したがって、環濠自体の成立が13世紀であり、その主たる機能が灌漑であっても、その内部に存在したか、もしくは新たに付加された居館の濠が掘削（もしくは従来の濠の拡幅）されたのが室町～戦国時代であった可能性は指摘し得る。ちなみに、若槻環濠集落の場合、居館の推定位置としては、集落の西端（図６の字「宮北」、「西垣内」）がその候補となるだろう[16]。いずれにせよ、若槻環濠に大和盆地における代表的平城である筒井城のような惣堀（外堀）的機能[17]を考えることは難しい。

今回の調査は総面積が100㎡余りの非常に小規模な調査であったが、以上のような多大な成果を収めることができた。環濠集落の調査といえば、諸般の事情によって満足な調査ができないものが多い中、大和高田市の有井環濠では関係者の努力によって多くの成果を収めている[18]。今回の調査はこの有井環濠の調査成果に触発されること大であったが、この若槻環濠の調査成果もまた、今後より多くの環濠集落の調査につながって行くことを祈念して止まない。なお、若槻環濠における今後の発掘調査に関しては、先述の集落西端部分（居館部分？）の調査が重要な意味を持つであろう。擱筆に際し、このことも付記しておきたい。

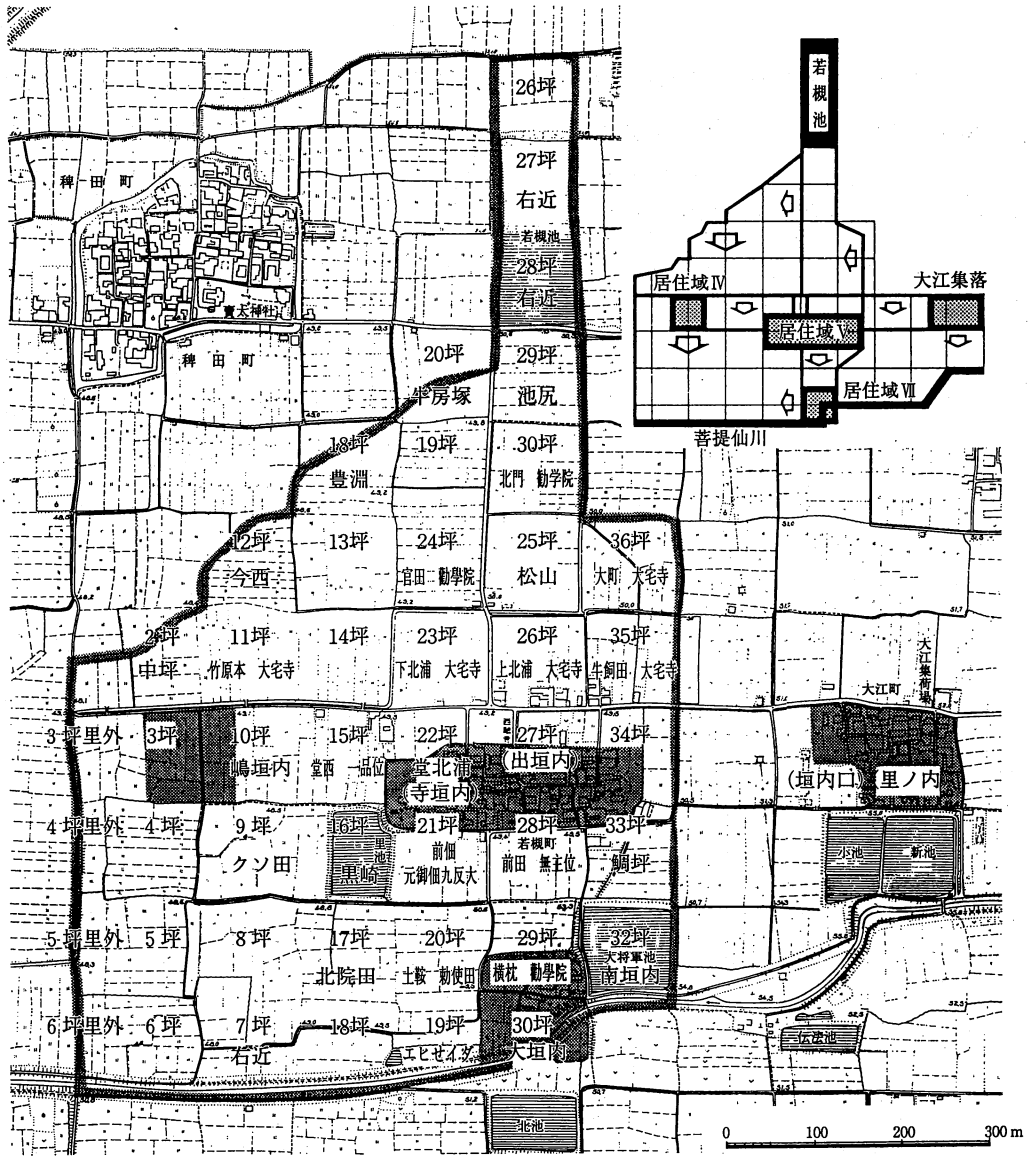



**図43　14世紀初頭の若槻荘周辺の集落配置復元図および灌漑システム模式図（右上）**

【注】

1）山川均「調査地の環境および周辺における既往の調査」『美濃庄遺跡今倉地区発掘調査報告書』大和郡山市教育委員会，1997

2）山川均「条里制と村落」『歴史評論』538，1995

3）若槻荘における集落景観に関わる研究史については、渡邊澄夫「環濠集落の形成と郷村制の関係」『増訂畿内庄園の基礎構造 下』吉川弘文館，1970、金田章裕「若槻荘」『講座日本荘園史７』吉川弘文館，1995、および山川均「中世集落の論理」『考古学研究』45－2，1998などを参照。

4）植原路郎『明治語録』明治書院，1978

5）赤膚焼の印銘に関しては、村上泰昭「赤膚焼の刻印」『赤膚焼』㈱大和古文化財保存財団，1991が有益である。

6）増田達彦『堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告書 SKT628地点・宿院町東３丁』堺市教育委員会，1999。ちなみに増田氏はこの堺環濠都市遺跡出土の木白印銘陶器を子息の木左（２代目木白　1826～1882）の作とするが、その根拠

は報告書中には示されていない。

7）赤膚焼窯元の小川一雅氏に完形品を実見させていただいた。

8）白神典之「堺摺鉢考」『東洋陶磁』19，1992

9）川越俊一「大和出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』1983

10）中世における土器の一括廃棄を考古学の面から考察したものとしては、山川均「土器をまとめてすてること」『文化財学論集』1994がある。

11）天保6年（1835）の「若槻村堀普請ニ付堀分杭・屋敷等絵図」渡邊澄夫・喜多芳之編『大和國若槻庄史料第2巻』吉川弘文館，近世篇水利40には、堀幅を場所によって広狭（1間7尺～2間2歩）はあるが、もともと2間前後と記しており、この値は今回の調査データとほぼ一致する。

12）前出注1）山川論文。

13）山川均「居館の出現とその意義」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』9，1999

14）前出注3）渡邊論文。

15）前出注13）山川論文。

16）前出注1）「若槻村堀普請ニ付堀分杭・屋敷等絵図」ではこの区域の南北と西側の濠を他の倍の幅で描いている。また、現在天満宮のある社地は周囲より一段高く土盛りされている。

17）山川均「筒井城に関する復元的研究」『関西近世考古学研究』Ⅳ，1996

18）前沢郁浩「有井環濠外濠第3次の調査」『平成9年度奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』1998

| No. | 器種名 | 計測値（cm） | 成形・調整・胎土の特徴 | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第２トレンチ　ＳＤ－０１表土層 | | | | | |
| 1 | 肥前磁器染付鉢 | 口(12.4) 高台( 5.4) 高( 5.9) | | | 焼き継ぎ有 |
| 2 | 肥前磁器染付皿 | 口(12.4) 高台( 5.4) 高( 5.9) | | | 蛇ノ目高台 |
| 3 | 陶器水滴 | 大径( 9.0) 底( 5.5) 高( 4.0) | | 胎:淡黄2.5Y8／3<br>釉:灰黄2.5Y7／2 | |
| 4 | 赤膚焼タバコ入れ | 高台( 8.2) | | 胎:にぶい黄橙10YR6／3<br>釉:暗オリーブ5Y4／3 | 印銘「赤ハタ」 |
| 5 | 肥前磁器染付段重蓋 | 口(10.2) 最大(11.5) 高( 2.0) | | | |
| 6 | 肥前磁器染付段重蓋 | 口( 7.3) 最大( 9.2) 高( 1.5) | | | |
| 7 | ガラス瓶 | 口( 2.0) 底径( 2.4) 高( 9.5) | | 透明 | ホーカー液（化粧水）容器 |
| 8 | ガラス瓶<br>ゴム製栓 | 口( 2.3) 底径( 4.5) 高(11.6)<br>大径( 1.7) 高(2.5) | | 紺青色 | |
| 9 | ガラス瓶<br>ガラス蓋 | 口( 2.8) 底径( 6.8) 高(13.3)<br>最大( 3.6) 高( 2.6) | 平面六角形<br>ネジ式 | 透明<br>透明 | イカリソース容器 |
| 第２トレンチ　野井戸 | | | | | |
| 10 | 肥前磁器染付鉢 | 復口(10.9) 高台( 5.6) 高( 6.0) | | | |
| 11 | 肥前磁器赤絵碗 | 復口( 9.2) 高台( 3.2) 高( 6.0) | | | 焼き継ぎ有 |
| 12 | 陶器碗 | 復口( 6.6) 高台( 3.8) 高( 5.2) | | 胎:淡黄橙10YR8／4<br>釉:暗オリーブ7.5Y4／3 | |
| 13 | 赤膚焼碗 | 高( 6.5) | 方形割高台 | 胎:橙5YR6／6<br>釉:暗オリーブ7.5Y4／3 | 印銘「赤膚山」「木 ㊁ 」 |
| 14 | 陶器蓋 | 復口(10.6) 高( 2.5) | | 胎:にぶい黄橙10YR7／3<br>釉:にぶい赤褐5YR4／3 | |
| 15 | 陶器蓋 | 口( 6.3) 高( 1.5) | | 胎:灰白2.5Y7／1<br>釉:赤褐5YR4／6 | |
| 第２トレンチ　ＳＤ－０１上層 | | | | | |
| 16 | 磁器染付碗 | 復口( 8.4) 高台( 2.8) 高( 3.7) | | | 口縁部に鉄釉 |
| 17 | 磁器染付碗 | 復口( 8.1) 高台( 2.5) 高( 4.0) | | | 口縁部に鉄釉 |
| 18 | 磁器瀬戸美濃染付碗 | 復口( 8.6) 高台( 3.2) 高( 4.4) | | | |
| 19 | 磁器瀬戸美濃染付碗 | 復口( 8.8) 高台( 3.8) 高( 4.5) | | | |
| 20 | 肥前赤絵碗 | 口( 8.3) 高台( 2.7) 高( 4.0) | | | 焼き継ぎ有 |
| 21 | 肥前白磁碗 | 復口( 8.0) 高台( 3.0) 高( 4.5) | | | |
| 22 | 肥前磁器染付碗 | 復口(10.0) 高台( 4.2) 高( 5.7) | | | |
| 23 | 肥前磁器染付碗 | 復口( 9.6) 高台( 4.7) 高( 5.9) | | | |
| 24 | 肥前磁器染付碗 | 復口(10.7) 高台( 4.0) 高( 5.9) | | | |
| 25 | 肥前磁器染付碗 | 復口(10.5) 高台( 3.5) 高( 6.4) | | | |
| 26 | 瀬戸・美濃磁器染付碗 | 復口(10.8) 高台( 4.4) 高( 6.2) | | | |
| 27 | 瀬戸・美濃磁器染付碗 | 復口(10.4) 高台( 3.8) 高( 5.8) | | | |
| 28 | 陶器碗 | 口( 8.2) 高台( 3.4) 高( 5.1) | | 胎:暗灰黄2.5Y4／2<br>釉:灰オリーブ5Y5／3 | |
| 29 | 陶器碗 | 復口( 9.1) 高台( 4.1) 高( 5.5) | | 胎:灰白2.5Y8／1<br>釉:灰白2.5Y8／2 | |
| 30 | 赤膚焼四方皿 | 口( 9.4) 高台( 3.7) 高( 3.1) | | 胎:浅黄橙10YR8／3<br>釉:灰白7.5Y8／1 | 印銘「赤ハタ」 |
| 31 | 白磁皿 | 口( 9.8) 高台( 5.4) 高( 2.3) | 型押し | | |
| 32 | 赤膚焼皿 | 復口( 9.4) 高台( 5.6) 高( 2.9) | | 胎:にぶい橙7.5YR7／4<br>釉:灰オリーブ5Y5／3 | 印銘「赤ハタ」 |
| 33 | 陶器蓋 | 口( 6.7) 最大( 8.6) 高( 2.3) | | 胎:黄橙10YR8／6 | |
| 34 | 肥前磁器染付蓋 | 口( 9.6) 高( 3.0) | | | |
| 35 | 肥前磁器染付皿 | 口( 8.7) 高台( 4.2) 高( 2.3) | | | 平面八角形 |
| 36 | 肥前磁器色絵段重 | 復口(12.0) 高台( 8.4) 高( 5.7) | | | |
| 37 | 土師皿 | 口( 6.4) 高( 1.3) | | にぶい赤褐5YR5／4 | |
| 38 | 土師皿 | 口( 6.4) 高( 1.2) | | にぶい橙7.5YR6／4 | |
| 39 | 土師皿 | 復口(10.2) 高( 2.2) | | 灰黄2.5Y8／2 | |
| 第２トレンチ　ＳＤ－０１中層 | | | | | |
| 40 | 土師皿 | 復口(10.3) 高( 2.3) | | にぶい黄橙10YR6／3 | |
| 41 | 瓦器椀 | | | 灰白5Y8／1 | |
| 42 | 瓦質摺鉢 | | | 灰白2.5Y8／1 | |
| 43 | 土師質土釜 | | | 灰黄褐10YR6／2 | 外面煤付着 |
| 44 | 肥前磁器染付碗 | 高台( 4.9) | | | 畳付に離れ砂付着 |
| 45 | 肥前陶器碗 | 高台( 4.7) | | 灰白2.5Y8／2 | 印銘有 |
| 46 | 堺焼摺鉢 | | 摺目(8本／単位) | 赤褐10YR5／4 | |
| 47 | 平瓦 | | | 灰5Y6／1 | 離れ砂付着 |
| 第２トレンチ　ＳＤ－０１下層 | | | | | |
| 48 | 土師皿 | 口( 7.0) 高( 2.5) | | にぶい黄橙10YR7／3 | |
| 49 | 土師皿 | 口(11.2) 高( 2.2) | | にぶい黄橙10YR7／3 | 灯明皿 |
| 50 | 肥前磁器染付碗 | 高台( 4.6) | | | 見込蛇ノ目釉剥 |

表２　遺物観察表１

| No. | 器種名 | 計測値(cm) | 成形・調整・胎土の特徴 | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第3トレンチ　SD－01上層～中層 | | | | | |
| 51 | 肥前磁器染付小坏 | 口( 7.4) 高台( 2.6) 高( 3.0) | | | 畳付に離れ砂付着 |
| 52 | 磁器染付碗 | 口( 8.2) 高台( 2.5) 高( 3.9) | | | |
| 53 | 瀬戸・美濃磁器染付碗 | 口(10.6) 高台( 3.6) 高( 5.3) | | | |
| 54 | 肥前磁器染付碗 | 口(10.2) 高台( 4.2) 高( 5.3) | | | |
| 55 | 肥前陶器皿 | 高台( 4.3) | | 灰白2.5Y8／2 | 印銘有「木弥」 |
| 56 | 陶器碗 | 復口( 9.2) 高台( 3.4) 高( 5.6) | | 胎:灰白2.5Y8／1<br>釉:灰白2.5Y7／1 | 貫入有 |
| 57 | 肥前磁器鉄絵蓋 | 高台( 9.4) 高( 3.0) | | | |
| 58 | 肥前磁器鉄絵蓋 | 高台( 9.2) 高( 2.6) | | | 離れ砂付着 |
| 59 | 肥前青磁仏飯器 | 復口( 6.2) 基底径( 4.2) 高( 6.9) | | | 基底部内墨書 |
| 60 | 染付磁器水滴 | 長辺( 6.7) 短辺( 4.6) 高( 6.9) | 型づくり | | |
| 61 | 肥前磁器染付段重 | 口( 7.0) 高台( 4.6) 高( 3.4) | | | |
| 62 | 陶器蓋 | 高台( 7.6) 高( 1.6) 最大( 9.8) | | 胎:灰白2.5Y8／2<br>釉:灰白5Y7／2 | 貫入有 |
| 63 | 陶器蓋 | 高台( 8.1) 高( 3.8) 最大(11.2) | | 胎:にぶい橙7.5YR6／4<br>釉:灰オリーブ5Y5／2 | |
| 64 | 寛永通寶 | 上下(2.18) 左右(2.18) 孔上下(0.40) 孔左右(0.38) 厚(0.10) | | | 新寛永(1697～1747 1767～1781) |
| 65 | 陶器甕 | | | コーヒーブラウン | |
| 66 | 信楽焼摺鉢 | | 摺目(7本／単位) | コーヒーブラウン | |
| 67 | 信楽焼摺鉢 | | 摺目(10本／単位) | ビンヤード | |
| 68 | 土製円板 | 長( 3.7) 短( 3.6) 厚( 1.2) | | 胎:橙2.5YR7／6<br>釉:にぶい赤褐2.5YR4／3 | 信楽焼甕 |
| 69 | 瓦質こね鉢 | | | 灰 N0／5 | |
| 70 | 土師質土釜 | 復口(16.2) 最大(23.8) | | にぶい黄橙10YR7／3 | 外面煤付着 |
| 第3トレンチ　SD－01下層 | | | | | |
| 71 | 肥前白磁紅皿 | 復口( 4.6) 高台( 2.5) 高( 1.9) | 型づくり | | |
| 72 | 肥前陶器碗 | 高台( 4.0) | | | |
| 73 | 土師皿 | 口( 6.5) 高( 1.2) | | 灰黄褐10YR5／2 | 灯明皿 |
| 74 | 肥前磁器染付瓶 | 底径( 4.4) | | | |
| 75 | 土師質土釜 | | チャート多く含む | 灰白2.5Y8／2 | 外面煤付着 |
| 76 | 土製円板 | 長( 4.3) 短( 4.1) 厚( 0.9) | 長石多く含む | 灰白 N8／0 | 信楽焼甕 |
| 77 | 堺焼摺鉢 | | 摺目(11本／単位) | にぶい赤褐2.5YR4／3 | |
| 78 | 堺焼摺鉢 | | 摺目(9本／単位) | にぶい赤褐2.5YR4／3 | 外面墨書有 |
| 79 | 軒丸瓦 | | 鉄線引き | 灰 N4／0 | 左三つ巴文 |
| 80 | 鉄鎌(刃部) | 刃部残存長(11.8) 幅( 3.3) 軸部長( 4.1) | | | |
| 第3トレンチ　SD－02下層 | | | | | |
| 81 | 土師皿 | 口( 8.2) 高( 1.2) | 雲母・クサリ礫多く含む | 橙5YR6／6 | |
| 82 | 土師皿 | 口( 8.2) 高( 1.3) | 雲母・長石多く含む | 橙7.5YR6／6 | |
| 83 | 土師皿 | 口(10.1) 高( 2.4) | 雲母・長石・クサリ礫多く含む | 橙5YR6／6 | |
| 84 | 土師皿 | 復口(11.6) 高( 2.4) | | 灰白2.5Y8／2 | |
| 85 | 土師皿 | 復口(12.0) 高( 1.4) | 雲母多く含む | 浅黄橙7.5YR8／4 | |
| 86 | 瓦器椀 | 口(12.1) 高( 4.3) | | 灰白5Y7／1 | |
| 87 | 瓦器椀 | 口(12.2) 高台( 4.7) 高( 4.2) | | 灰白7.5Y8／1 | |
| 第3トレンチ　SD－02上層 | | | | | |
| 88 | 土師皿 | 口( 5.7) 高( 1.1) | 雲母多く含む | にぶい黄褐2.5Y6／3 | 灯明皿 |
| 89 | 土師皿 | 口( 6.3) 高( 0.9) | 雲母多く含む | にぶい黄褐10YR6／3 | 灯明皿 |
| 90 | 肥前青磁神酒徳利 | 口( 1.4) 最大( 4.6) | | 青磁色 | |
| 第3トレンチ　SD－04 | | | | | |
| 91 | 土師皿 | 口( 8.7) 高(1.4) | 雲母・長石多く含む | にぶい黄橙10YR7／4 | |
| 92 | 土師皿 | 口( 8.9) 高(1.3) | | 浅黄橙10YR8／3 | |
| 93 | 土師皿 | 復口( 9.2) 高( 1.4) | 雲母多く含む | にぶい黄橙10YR7／4 | |
| 94 | 土師皿 | 口( 9.8) 高( 1.4) | 長石・クサリ礫多く含む | にぶい黄橙10YR7／3 | |
| 95 | 土師皿 | 口( 9.4) 高( 1.6) | 雲母・クサリ礫多く含む | 橙7.5YR6／6 | |
| 96 | 土師皿 | 口( 8.6) 高( 1.4) | 雲母・長石・クサリ礫多く含む | 橙7.5YR6／6 | |
| 97 | 土師皿 | 口( 8.6) 高( 1.3) | 雲母・クサリ礫多く含む | 橙7.5YR6／6 | |
| 98 | 土師皿 | 口( 8.9) 高( 1.6) | 長石多く含む | 橙7.5YR6／6 | |
| 99 | 土師皿 | 口( 9.0) 高( 1.5) | 長石・クサリ礫多く含む | 橙7.5YR7／6 | |
| 100 | 土師皿 | 口( 8.8) | 雲母・長石多く含む | にぶい黄橙10YR7／4 | |
| 101 | 土師皿 | 口( 8.8) 高( 1.4) | 長石・クサリ礫多く含む | 橙7.5YR7／6 | |
| 102 | 土師皿 | 口( 8.4) 高( 1.5) | クサリ礫多く含む | 橙7.5YR7／6 | |
| 103 | 土師皿 | 口( 9.0) 高( 1.6) | 長石多く含む | 橙7.5YR7／6 | |
| 104 | 土師皿 | 口( 9.0) 高( 1.6) | 雲母・クサリ礫多く含む | にぶい黄橙10YR7／4 | |
| 105 | 土師皿 | 口( 8.6) 高( 1.5) | 雲母・クサリ礫多く含む | 橙7.5YR7／8 | |
| 106 | 土師皿 | 口(11.5) 高( 2.0) | | 浅黄橙10YR8／4 | |
| 107 | 土師皿 | 口(12.4) 高( 2.4) | 雲母・長石多く含む | にぶい黄橙10YR7／4 | |
| 108 | 土師皿 | 口(13.0) 高( 2.4) | | にぶい黄橙7.5YR7／4 | |

表3　遺物観察表2

| No. | 器種名 | 計測値（cm） | 成形・調整・胎土の特徴 | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 109 | 土師皿 | 口(12.0) 高( 2.3) | 雲母・長石多く含む | にぶい黄橙10YR7／3 | |
| 110 | 土師皿 | 口(12.4) 高( 2.3) | | 灰白2.5Y8／2 | |
| 111 | 土師皿 | 口(12.4) 高( 2.3) | 雲母多く含む | 橙7.5YR7／6 | |
| 112 | 瓦器椀 | 口(12.6) 高台( 4.8) 高( 3.6) | | 灰白5Y8／1 | |
| 113 | 瓦器椀 | 口(12.5) 高台( 4.4) 高( 3.9) | | 灰白5Y8／1 | 重ね焼きの痕跡有 |
| 114 | 瓦器椀 | 口(12.2) 高台( 4.1) 高( 3.9) | | 灰 N6／0 | |
| 115 | 瓦器椀 | 口(13.1) 高台( 4.8) 高( 3.9) | | 灰白2.5Y8／1 | 重ね焼きの痕跡有 |
| 116 | 瓦器椀 | 口(12.8) 高台( 4.2) 高( 3.8) | | 灰白2.5Y8／1 | |
| 117 | 瓦器椀 | 口(12.8) 高台( 4.9) 高( 3.9) | | 灰白5Y8／1 | 重ね焼きの痕跡有 |
| 118 | 瓦器椀 | 口(13.0) 高台( 4.4) 高( 4.0) | | 灰白7.5Y8／1 | |
| 119 | 瓦器椀 | 口(13.0) 高台( 4.1) 高( 4.2) | | 灰白5Y7／1 | |
| 120 | 瓦器椀 | 口(12.8) 高台( 4.4) 高( 3.9) | | 灰白5Y8／1 | 重ね焼きの痕跡有 |
| 121 | 瓦器椀 | 口(12.9) 高台( 4.7) 高( 3.9) | | 灰白5Y8／1 | |
| 122 | 瓦器椀 | 口(13.4) 高台( 5.6) 高( 3.7) | | 灰白5Y8／1 | 重ね焼きの痕跡有 |
| 123 | 瓦器椀 | 口(13.0) 高台( 5.0) 高( 3.8) | | 灰白2.5Y8／1 | 重ね焼きの痕跡有 |
| 124 | 瓦器椀 | 口(12.7) 高台( 5.1) 高( 3.9) | | 灰白5Y8／1 | 重ね焼きの痕跡有 |
| 125 | 瓦器椀 | 口(12.8) 高台( 3.7) 高( 3.8) | | 灰白5Y8／1 | 重ね焼きの痕跡有 |
| 126 | 瓦器椀 | 口(12.1) 高台( 3.7) 高( 4.1) | | 灰白5Y8／1 | |
| 127 | 瓦器椀 | 復口(12.8) 高台( 6.2) 高( 4.3) | | 灰白5Y8／1 | |
| 128 | 瓦器椀 | 口(12.6) 高台( 4.7) 高( 3.8) | | 灰白5Y8／1 | 重ね焼きの痕跡有 |
| SD－01　木製品 | | | | | |
| W 1 | 漆器椀 | 口(11.8) 高台( 6.4) 高( 4.6) | | | 内外とも朱漆 |
| W 2 | 用途不明板材 | 上下( 8.9) 左右( 8.9) 厚( 0.8) | | | 桐 |
| W 3 | 独楽 | 高( 3.9) 幅( 4.2) | 轆轤びき | | 広葉樹 |
| W 4 | 用途不明板材 | 長(14.9) 幅( 4.3) 厚( 1.5) | | | 針葉樹 |
| W 5 | 用途不明板材 | 長(17.1) 幅( 4.6) 厚( 1.7) | | | 針葉樹 縁に付着物有 |
| W 6 | 蓋 | 径(13.5) 厚( 1.7) | | | |
| W 7 | 下駄 | 長(22.4) 幅( 7.6) 高( 7.2) | | | 左足用 指の痕跡有 |

【凡例】 口：口径　復口：復元口径　高台：高台径　最大：最大径　底：底部径　復底：復元底部径　高：器高
色調に関しては、基本的に『新版標準土色帳』を用い、それに該当しない色種に関しては『標準色カード202』（日本色研事業）に拠った。

表4　遺物観察表3

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | わかつきかんごうだいいちじはっくつちょうさほうこくしょ |
| 書名 | 若槻環濠第１次発掘調査報告書 |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 大和郡山市文化財調査概要 |
| シリーズ番号 | ３９ |
| 編著者名 | 山川　均 |
| 編集機関 | 大和郡山市教育委員会 |
| 所在地 | 〒639-1007　奈良県大和郡山市南郡山町５５４－１　TEL 0743-53-1151 |
| 発行年月日 | ２０００年3月３１日 |

| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 ° ′ ″ | 東経 ° ′ ″ | 調査期間 | 調査面積 ㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| わかつきかんごう<br>若槻環濠 | ならけん　やまとこおりやまし<br>奈良県大和郡山市<br>わかつきちょう<br>若槻町　50－１、51、255－１ | 29203 | | | | 19990802<br>～19990824 | 117 | 範囲確認 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 若槻環濠 | 中世<br>環濠 | 中世～<br>近世 | 環濠・溝・土坑 | 中世土器<br>近世土器・陶磁器<br>木製品 | 環濠の初現時期をほぼ特定 |

大和郡山市文化財調査概要39

若槻環濠第１次発掘調査報告書

平成12年３月31日

編集・発行　大和郡山市教育委員会
大和郡山市南郡山町554－１

印　　刷　明新印刷株式会社
奈良市南京終町３丁目464番地